

「確乎りしておくんなさいよ、奥さん。人殺しがあつたつて、一體、どうしたといふわけだかねえ。」

訊いて見ると夫人は、その時ふいに顔を伏せて、ワツとばかりに泣き出してしまふ。

「強盗です。強盗が入りました。」

「え、強盗？……」

「強盗が、あたくし一人のところへ入つて來まして、さうしたらそこへ、主人が歸つて參つたものですから、主人と強盗とが格闘をしまして……主人は、殺されてしまひました。」

言葉や順序もしどろもどろ、それから夫人が訴へたところを纏めて見ると、事柄は凡そ次のやうな次第である。

場所、いふまでもなく逢魔ヶ淵にある長塚氏の別荘——。

別荘ではその夜、主人の長塚氏が急用のため東京へ行つて、綾子夫人が一人だけ留守を守つてゐた。

平生だと別荘には、長塚氏が留守になつた時でも、滅多に夫人が一人きりといふことはない。女中がゐるし書生もゐる。晝のうちは、近くの農家から雇はれた下男が一人、通ひで別荘へ來てゐたのだつたが、折悪しく今夜は長塚氏が、東京での用達の都合から書生を供に連れて行つ

たし、女中は、三日ほど前から病氣になつて、田舎の親元へ歸つて行つてしまひ、夜のことだから、通ひの下男も來てゐないといふ始末。

夫人は、十一時頃戸締りをして、枕に響く海鳴りの音を、淋しくおどろ／＼しく思ひながら、間もなく眠りについたのでつたが、ふと誰かにゆり起されるやうな氣がして眼を覺ますと、枕もとには、異様な覆面をした怪漢が、どつかり胡坐をかい坐つてゐる。夫人は、ギョツと胸を轟かしたが、弱身を見せてはならぬと氣がついて、

——あなた、誰です？

懸命な語氣できめつけて見ると、

——誰でもねえ。俺ア盗つ人だよ。金を出して貰えてえ。

——お金は、ありません。歸つて下さい。

——フフ、金を出しや歸つてやるよ。金があることは睨んで來たんだ。痛い目を見るのがいゝか金を出すのがいゝか。

賊は、悠々落着いていつて、火鉢の横の青疊へ、グサリと七首を突き立てゝゐる。

夫人は、仕方がなかつた。

有るだけのものは與へてやつて、一刻も早く立退いて貰はうと考へたが、さてそれから、指に

あつたダイヤの指環もぬいてやり、簞笥の抽斗からは、恰度にあつた現金を何百圓か出してやる  
と、

——そちら見る。こんなに金が有つたちやねえか。ウッフフ、有難え〜。

賊は、ホク〜もので喜びながら、しかし取つたよけのものを着てゐた背廣服のポケットへ押し込んでしまふと、

——時に、どうだね、奥さん。お前さんは、バカに美しい顔をしてゐなさる。俺やね、お前さんみていな女が大好きなんだが。

いひながら、急に厭らしく眼を光らし、夫人の片手をぐいと握つてしまつた。

猛獸に掴まれた小兎同様、夫人は生きた氣持もない。

『あたくし、到頭、聲を立てずにはゐられませんでした。聲を立てると、賊は、騒ぐな、騒ぐと痛い目を見せるぞ、といつて、無理にあたくしを抱きすくめようとするものですから、あたくし、一生懸命で抵抗をして、漸く賊の腕の下から逃げ出したのですけれど、さうすると恰度その時に、廊下にバタ〜登音がして、誰か人が来てくれた様子。あたくし、あゝ有難いと思つて助けてえ！』と大聲に呼びますと、居間の口からバツと飛び込んで来たのが主人だったので。主人は、何かの都合があつて、急に東京から歸つて来たのでせう。あたくしは、主人の顔を見て、

あゝよいところへ歸つて来てくれたと思ひ、しかしそのあとで、すぐと恐ろしいことが起つてしまひました……』

夫人は、その時のことを思ひ出してか、恐怖の顔を硬ばらせながら話し續けたが、居間へ飛び込んだ長塚氏は、一眼でその場の様子を見てとると、いきなり賊の胸へ組みついて行つたものらしい。

それから、筆舌に盡し難い凄惨な格闘が演ぜられたとのことだつた。

賊と長塚氏とが、上になり下になりして格闘してゐる時、夫人は賊の足で激しく胸を蹴りつけられて、一時氣絶してしまつたが、この氣絶の間にこそ、實は最も恐ろしいことが起つたと見てよいやうである。

夫人は、しばらくして正氣に戻り、すると居間の中はあたり一面の血の海で、その中に長塚氏が俯伏せになつて倒れてゐる。賊の姿は見えずに、長塚氏だけが、既にピクリとも身動きが出来ず、全く絆切れてゐたといふのだつた。

『あたくし、夢中でした。主人を狼狽て、抱き起しました。でも主人は、眼を半分見開いたまま、一言も物を言ひません。呼んでも叫んでも返事をしません。見ると軀中が傷だらけで、その上肌けた胸の乳の下には、パツクリと口を開いた大きな傷があるので……』

前いつた通り、女中もゐなければ書生もゐない。  
そのあとで夫人は、別荘から駐在所まで、息を切らし、駈けつけて来たといふわけである。

### 烏の羽根

『オイ、人殺しがあつたさうだぞ。』

『ウン、さうだつたてな。俺も今、聞いただ。長塚さんこの旦那が殺されたつちふでねえか。』  
『さうだつてよ。強盗が入つて、長塚さんを殺して置いて逃げたつちふことだ。別荘へ行つて見べえか。』

『うむ、行くべえ、行くべえ——』

夜が明けた時、村は大騒ぎになつてゐた。

誰いふとなく、別荘の惨事は、忽ち知れ渡つてしまつたのである。

男も女も、老人も子供も、ワイ／＼いつて逢魔ヶ淵へ押しかけて来る。

脇山巡査は、その頃にもう人を頼んで、二里ほど離れた佐野といふ町の警察署まで、事件の突發したことを知らせてやつたし、自分は、應援に来て貰つた隣村の巡査と協力し、一通り事件發

生の現場を檢視したり、別荘内外の情況などを、素早く見廻つて歩いたりなどしてゐたが、間もなくそこへは、佐野町の署長を始めとして、縣刑事課の係官達、更にまた地方裁判所の檢事一行もやつて来たので、こゝに愈々正式な取調べが開始されることゝなつた。

被害者長塚氏の死體は、この時まで別荘の奥に、殺された時の情況のまゝで寝かされてゐる。

係官達は、第一にその死體を調べたが、それは二目と見られないほど酷ごたらしい死體だつた。やられた兇器は、随分鋭利なものだつたらしく、その創痕が合計三十何ヶ所がある。突いたの斬つたの引き裂いたの、さうして左乳下の心臓が、八種ほど深く割られてゐて、これが最後の致命傷になつてゐたのだつた。殺される前の激しい格闘の状態が、あり／＼と眼の先きへ浮かぶ氣がする。格闘中、叫び聲や物音がしたことだらうけれど、生憎と別荘の近くには人家がなく、誰もその騒ぎを聞いたものはない。血腥いこの惨劇の唯一の目撃者たる綾子夫人は、格闘が始まつてから長塚氏が殺害されてしまふまで——イヤ、實は賊が逃げ去つてしまふまで、その場に失神してゐたといふことだつたが、若しかして失神せずゐたところで、か弱い女の身としては手出しをすることもならなかつたらうし、聲を上げて助けを呼んでも、恐らく誰一人、駈けつけてくれる者もなかつたらうと思はれる。

『可哀相に被害者は、何も獲物を持たず、素手で賊に組付いて行つたんだよ。相手の兇器を握ぎ

取らうとしたのだらう、兩手共、ひどく掌を傷つけてゐるから。」

「斬られても突かれても、屈せずには賊へ武者ぶりついで行つたことがよく判る。賊の方も、滅多矢鱈に兇器を振り廻したんだね。抵抗されて、自分も夢中になつて格闘をしてゐるんだ。この賊は、どうもあまり度胸や腕つ節のある奴ぢやない。駆出しのゴソ泥が、女一人の別荘と見て、居直り強盗になつたといふくらゐのものだぜ。氣絶した細君が、人相やなんか、見て置いてくれるとよかつたんだがねえ。」

係官達は、最初そんなことを話し合つてゐたが、賊の人相風體については綾子夫人が、『いえ、覆面をしてゐましたから、顔は全然判りません。茶色つばい背廣の服に半ズボンで、足は、ゴム底の地下タビを穿いてゐたやうに思ひますが。』といつてゐる。

松葉牡丹の咲いてゐる緒土の庭には、なるほど大きな地下タビの痕がいくつも見つかつたし、その足痕は、廊下にも薄く残つてゐる。中庭へ向いた茶の間の雨戸一枚外されてゐて、賊はここから侵入したと判るのであつた。

係官達は、綾子夫人の申立て以外に、猶もつと確實に、賊の人相風體また素性などを知らせてくれる手掛りを欲しいと思ひ、あちらこちら熱心に探し廻つたが、そのうちに驚くべき一つの

発見をした。

別荘の庭には井戸がある。

舊式な釣瓶式の井戸だつたが、この井戸の釣瓶の繩に、眞黒な烏の羽根が一枚、藁しべて結びつけてあるのだつた。

烏の羽根を見つけると、係官の一人が、愕然として叫んだ。

『オイ、こりや大變な奴だぞ。』

『え、何か。』

『この烏の羽根だよ。こいつ、三ヶ月ほど前に、東京の警視廳から通牒のあつた大物だよ。脱獄囚だー』

『ほう。』

『君は、忘れてゐるんだらう。こいつは、東京だの神奈川だの、あの邊を散々に荒し廻つた前科者だよ。名前は、確か押野とかいふんだ。最近には横濱の支那人町でつかまつて、しかしちきに脱獄をしまつた奴でね……』

説明されてゐるうちに、相手の係官もハツと思ひ出した顔になつたが、同時にその顔色は、見る／＼激しい緊張で燃え上つて來た。

無理もない。

それは實際に、相當名の知れた兇賊だったのである。

強盜傷害暴行などの前科が、五犯か六犯はあるだらう。その押野といふ男は、もう六十に近い老人の筈だが、性質は飽くまで猛悪な奴だとされてゐる。最近の指名手配では脱獄囚といふことになつてゐるが、この手配以前にも、某所で押送の途中を逃げたことがあるし、どうして大變なしたゝか者である。烏の羽根とこの賊と、どういふ關係があるかといへば、それは一種の迷信らしい。一般にかういふ社會の惡黨仲間では、墓石のかげらを持つてゐるとか、ある家へ竊盜に入る時、その家の前で排尿をするとか、いろ／＼な迷信を持つてゐるもので、押野には、烏の羽根がお守りだつた。前に數回逮捕された時、そのことはもう自白もしてゐる。どこかで荒仕事にからうとすると、その前に烏の羽根を必らず附近へ安置して置く、これが押野の習癖なのだ。

意外な發見のことが報告されると、係官達は一樣にワツと凱歌を上げさうになつた。

これでもう、ハツキリと賊の素性は判明してゐる。

脱獄したほどの奴だから、逃足の早いことは豫想されるが、かといつて、まだ遠くまでは逃げまいといふ見込みがある。逮捕は時日の問題、遅かれ早かれ兇賊は、必らず追ひ詰めてしまふことだ。

とが出来ると考へたのだつた。

彼等は、即刻、手配にかゝつた。

佐野町の警察署を捜査本部として、こゝから電報や電話を使つて、縣下一帯に水も洩らさぬ非常線を張りめぐらした。

ところが――。

一同かうして元氣一パイ、押野逮捕の意氣込みに張り切つて來た頃、たゞ一人何かボンヤリと、妙に考へ込んでゐた人物がある。

それは、地元駐在所の脇山巡査だつた。

脇山巡査だけは、賊の素性が脱獄囚押野と判明した時でも、

「ほう、なるほどな。烏の羽根には氣がつかかなかつただよ……」

いつたり、甚だ煮え切らぬ目付をして、當惑したやうに首を傾けてしまつた。

彼は、まるで元氣がないやうに見えた。

捜査方針が、押野取押へのため非常線を張りめぐらすことに決定した時でも、ほかの同僚達は、我こそ押野をひつつかまへて、第一の殊勳を樹てようといふので意氣込んでゐるのに、全然その意氣込みが無いかの如く、たゞブラ／＼と事件現場の附近を歩き廻つてゐて、甚だ憂鬱さう

な顔附だつた。

隣村の若い巡査が来て、ボンと肩を叩きながら、

「オツ、脇山君。どうしたい？ ひどく何かボンヤリしてゐるぢやないか。」  
怪訝さうに顔を覗き込むと、

「うむ、別にボンヤリしてゐるのでもねえだ。しかし、變てこなことがあるからな。」  
「變てこつて、何がだい。」

「押野といふ奴のことだよ。押野が犯人だといふ話だがね。」

「押野に違ひないさ。仕事にかゝる前、烏の羽根をお守りとして飾つとくといふ、こんな迷信はたんとはない。押野といふ奴獨特のものださうだ。押野がこの界限へ紛れ込んで来たのに違ひないさ。何か君はそれについて……」

「イヤ、イヤ、そりやね、押野が来たつてことは疑はねえだよ。だが、考へると矢張り變なところばかりだ。僕には、腑に落ちないことが幾つかある。——早い話が、まアこつちへ来て見てくんな。」

いひながら脇山巡査は、先きに立つて歩き出したが、間もなく別荘の裏手の、コンモリした林の中へ来ると、そこでふいに立止まつて地上を指差した。

見ると、そこは濕つた赭土のところ／＼草の生えな小徑で、小徑には、いくつかの靴の痕がついてゐる。

脇山巡査は、地面へ踏み込みながらいつた。

「ねえ君、問題はこの靴痕にあるだよ。」

「へえ、これがどうして問題になるのかね。賊は、地下タビを穿いてゐた筈なんだが。」

「うむ、賊が地下タビを穿いてゐたつちふことだけは、間違ひぢやなかんべ。だが、よく見てくんな。この靴痕は、みんな同じ大きさの靴痕で、それも二種類あるでねえか。一つは、別荘を出て、別荘から遠ざかる方へ向いてゐるし、一つは、別荘の方へ歸つて行く時の足痕に違えねえだ。——ところで、この別荘を遠ざかる方の足痕は、この通り、地べたへ深く入り込んでゐるのに、歸る方の足痕は、たゞ薄くついてゐるだけだかんべ、これはお主、どういふわけだと思ふ。」

「オア——」

「僕の思ふのには、これは誰かが別荘から、何か重みのあるものを擔ぎ出して行つて、歸りに、その擔いで行つたものを、どこかへ置いて来たといふ證據になるのさ。行きには、重いものを擔いでゐたから、地べたの足痕が深くメリ込んでゐるといふわけだ。一つ、ぶち明けて話して

もよかつべ。僕は實は、この靴痕が誰のものだか、それももう確かめてしまつてあるだよ。』  
『ほう。』

『別荘へは、長塚さんとの親戚だとか、東京でやつてゐる店の者だとかが、多勢來てゐるだ。僕は、その人達の靴を、こつそり玄關へ行つて調べて見たゞが、中に一人、大きさいひ靴底のマークの工合といひ、ちゃんと同じ靴を穿いてゐる人が見付かつてゐるだ。僕は、この人物についてのがハツキリせにや、どうも今度の事件は、解決されさうもないと思つてゐる。押野のあとを追ひ廻すだけでは、大して役にも立ちさうにないテ。』

いかなる着眼點があつてこんなことを言出したものか、氣のせむかこの老いたる田舎巡査の瞳には、この時はじめて、何か知ら確乎たる、信念のやうなものが浮かび上つて來てゐる。

『兎も角も、押野といふ賊が別荘へ侵入したといふ、この點だけは僕は疑つちやをらん。たゞこの事件は、單なる強盜殺人事件ぢやなかつべと思ふ。僕など、こんな田舎の老害巡査で、縣刑事課の連中が押野さへ逮捕すればいゝといつてゐるのを、横つちよから何を言出したところで、とても取上げてはくれまいと思ふで、僕や、もつといろ／＼ハツキリするまで、何も言ふまいとは決心してゐるが、まア見てゐて御覽じ。今にきつと、何かどえらく變ちくなことが持上つて來るにきまつてるだかな。』

彼は、眉を上げて別荘の方を眺めながら、ゆつくり／＼言ひ足した。

### 鹿の子しほり

當局は、躍起になつて兇賊押野の行方を突き止めようとしてゐて、まだしかし、一向にその効果は上らなかつた。

犯行後、彼は、巧みに姿を隠してゐる。

いろ／＼の情況を綜合して見ると、彼が汽車へ乗つたとか自動車で逃げたとか、さういふ形跡は全くないし、して見れば、矢張り遠つ走りをしたといふことは考へられない。いづれこの近くの土地、少くとも同一縣下に身を潜めてゐるに違ひないとは思はれるのだつたが、さて草の根を分け、地を掘るやうにして嚴密な捜査を續けても、逃走の経路は判らない。手懸りがどうにもつきかねる有様だつた。

縣刑事課の連中は、非常に口惜しがつてゐたことだらうが仕方がない。

別荘での殺人事件後、日は徒らに過ぎ出した。

三日、五日、一週間――。

さうして、矢張り、押野は、逮捕されなかつた。

話はこので、ガラリーと變つてしまふことになるが、次には東京の神樂坂にあつた、花村家といふ藝妓屋での小さな出来事。

ある晩遅く、このうちの藝妓で喜代鶴といふ女が、お座敷歸りだらう、大そう酒に酔つ拂つて、箱屋の男衆に介抱されながら、足許も危げに戻つて來た。

喜代鶴は、花村家では姐さん株。しかしまださう年増ではないし、藝達者で美しく、平生は素人の女のやうに氣質の溫和しい女である。

男衆は、喜代鶴を送り届けて置いて、三味線の箱をトンと上り框へ置き、花村家の女將に向つていつた。

『女將さん、喜代鶴姐さんを今夜は氣をつけて下さいよ。今夜は姐さん、變てこなんですから。』  
『まア、變てこつてどうして?』

『いつも、酒なんか飲み過すこたアねえのに、今夜はガブ飲みの大トラでさ。お座敷でへべれけに酔つちやつて、容に悪態はつくし亂暴はするし、どうにも方返しがつきやしねえ。——あつしの思ふにや、例のハの字のことが原因ですがね。』

『オヤ、さうだつたの。ハの字のこと、矢張りいけなかつたのかねえ。』

『いけねえにも何にも、あつしも薄々事情を聞いて腹を立てゝゐるんだが、あんな不人情な男も』

ねえですよ。喜代ちゃんも腹を立てるなア無理もねえが、まア女將さん、いゝやうに宥めてやつておくんない。今夜は、よほど氣が立つてゐるらしいですからね。』

ハの字とは、いはずと知れた喜代鶴の愛人。

女將と男衆とがヒソ／＼聲で話してゐると、喜代鶴は、生酔ひ本性違はずで、

『あら、かアさんと金ちゃん、何を愚圖々々いつてんのさ。あたしが酔つてるのがいけないつていふの……あゝ、あゝ、口惜しい。あたし口惜しい!』

ふいに疊へ突つ伏して、ワツと激しく泣きながら、

『なんない畜生! ハの字が、どうしたつていふんだい。あたしは、あんな男、犬つころだと思つてゐる。犬だ、犬畜生だ! あゝ畜生!』

帯の間から出した紙入れを、ビシーリ、向ふの鏡臺へ向つて投げつける。

それは平生の喜代鶴とは、似ても似つかぬ狂亂ぶりだつた。

女將と男衆とは眼を見合はした。

さうして女將は、

『困りものだけど、可哀相には可哀相だよ。あたしや、あの子に同情する。本當にハの字つてば、薄情男のレッテルみたいなの男なんだものねえ。』



そつと男衆にいつてゐた。

こゝで説明をして置くならば、喜代鶴といふ女は、もと本所の方の小さな荒物屋の娘である。幼い時から藝事が好きで、それに両親の都合もあつたりして、十六の年に雛妓で出たが、彼女には間もなく愛人が出来て、その愛人は、春木梅之助といふ俳優みたいな名前の、昔は喜代鶴と同じ町内に住んでゐた文房具屋の息子だつた。舊い幼馴染同志が、いつしか戀仲になつてしまつたわけである。

無論ハの字といふのは、この梅之助のことだつたが、梅之助は、両親がそんなに裕福でもないのに、小學校を出てからは、中學校へも行つたし中學校から高等商業學校へも進んで、この間の學資は、半ば以上喜代鶴が貢いでゐたといはれてゐる。年は、喜代鶴の方が二つほど上で、しかし二人は仲がよかつた。高商を卒業してからは、梅之助ももう立派なサラリーマン、いづれは二人が結婚する筈になつてゐたところが、近頃、變に仲がこじれて來てゐる。男が、女に、學資まで貢がせて來てゐながら、ふいに別れ話かなにかを持ち出したものらしい。よくあることで、こゝに喜代鶴の、自棄酒を飲む原因があるのだつた。

その晩花村家では、女將をはじめ、妹、藝妓や仕込みつ妓達が、かうしてヒステリックに酔つ拂つてしまつた喜代鶴を、定めし大骨折りで、宥めたり賑したりしたことだつたらう。

喜代鶴は、泣いたり喚いたり口惜しがつたり、でも次第に酒が醒めて來ると、しーんと變てこに考へ込んでしまつて、

「濟みませんでした女將さん。もういゝの。大丈夫。心配しないで。」

そんな風にいつて、迷惑をかけたことを詫びたりなどした。

皆、喜代鶴の氣持が落着いたと思つたから安心をして、

「ではね、もうハアさんのことなど、あんまり考へないやうにしないよ。男心つて、大抵はそんなものだからさ。」

とか、

「いゝぢやないの。不實な男なんか、綺麗さつぱり忘れた方が利口だよ。ハアさんだけが男で、ほかに男のない世界ぢやあるまいし……」

とか、月並みな慰さめをいつて寢てしまつたが、するとそれから二時間ほどのち、この花村家の裏口から、そつと物音を立てぬやうにして、足袋はだしのまゝ抜け出して來たのが喜代鶴である。

彼女は、ふだん着に羽織をひつかけただけの身装で、しかし、蒼い顔をしてゐた。

藝妓屋や待合の並んでゐる横町を、ハタ／＼と刻み足で走り抜けると、電車通りにある駐車場

まで出てタキシをつかまへ、

『巢鴨までやつて頂戴。日の出莊といふアパートがあるのよ。』  
沈み切つた聲でいつた。

十数分のうち、その日の出莊アパートといふのの前へ来て、こゝでタキシを歸してしまふと、彼女は、しばらくアパートの前庭にある植込みの中に立つて、その建物の二階のあたりを見詰めてゐたが、やがてホツと深い溜息をしながら、自分の胸にしめてゐた鹿の子しぼりの帯揚げを解くと、これをそばに茂つてゐた大きな百日紅の枝へ投げかけた。

二度三度やり損なつたが、でもやつとこさ投げかけて垂れ下がつた鹿の子しぼりを、下でキユツと結んでしまふと、これで一つの輪が出来た。

輪は、位置が少し高かつた。

それで彼女は、あたりを一寸見廻して、ちき近くにあつた植木鉢を二つ持つて来た。

さうして、そのグラ／＼する植木鉢を足場にするよ、

『春木さん。あなたを恨んで、恨み死にに死んだ女があるつてこと、一生忘れないやうにしてあげるわね！』

小さく口のうちで呟いて、その綺麗なしなやかな首を、ぐいと鹿の子しぼりの輪の中へ持つて

行かうとした。

實に危険な瞬間――。

この時にしかし、すぐうしろの間の中から、ニユツと両手を出すと一緒に、女の腰を宙へ抱き上げ、

『オツトツト、あぶねえ／＼死ぬのは止した方がよかんべえと思ふが。』

呑気な聲でいつたのが、思ひきや田舎巡査の脇山老人である。

老巡査は、制服でなく、田舎者丸出しの、古ぼけた背廣服を着てゐたが、自殺しかけた女を抱きとめて置いて、なぜか顔中に、抑へ切れぬやうな喜びの色を浮べてゐる。

喜代鶴は、激しく身悶えした。

さうして、

『あゝ、放してエツ！ 放して下さアい。死なして下さアい！』

泣き聲で叫ぼうとした。

が、脇山巡査は、甚だ悠々と落着き拂つてゐる。

『これ、姐さん。でかい聲をするでねえだよ。騒げば騒ぐほど人が出て来て、死ぬことが出来なくなるだかな。』

眞面目なのか巫山戯てゐるのか判らぬやうなことをいひ、さてまた早口に喜代鶴の耳へ囁いた。

「姐さん。儂や、田舎もんだが警察の者だよ。事情は、儂がゆつくりと聽いてやるから話すがいい。悪いやうにはせん。今、あんた、春木さんがどうしたとかかうしたとか言つてたたんべ。その春木さんに、實は儂らも用がある。この五日ほど、儂は春木さんのあとばかり付け廻してをつたよ。」

警察の者と聞いて、さすがに喜代鶴もギョツとした顔附。

その手首を、老巡査は、しつかり掴んでゐて放さなかつた。

「何も逃げることはねえだよ姐さん。姐さんの言つてゐる春木さんといふのは、長塚といふ機械商の販賣係りをやつてゐる春木さんのことだろが、儂や、その春木さんについて、いろ／＼調べたいことがあるわけだ。さア、儂と一緒にこちらへ來なさい。」

さうして喜代鶴を、その近くにあつた交番まで、ぐい／＼引つ張つて行つてしまつた。

時刻はもう随分遅くて夜明けに近い。

喜代鶴については、いかなる取調べが行なはれたことだつたらうか。

それから二時間ほど経つた時に臨山巡査は、喜代鶴の身柄を交番へ頼んで、保護検束の手續

きをとつて貰ふことにしたが、夜が明けるも一緒彼自身は、意氣揚々と交番を飛び出し、その折、さも満足さうに呟いた。

「やれ／＼、有難い！ 可哀相な女だが、あの女が出て來たお蔭で、大層事件がハツキリしよつた。どらやらこれで、儂の見込みは狂はなかつたといふことになる。あとは、押野を探し出しさへすればいゝのだかな……」

### 発見された押野

兇賊押野と春木梅之助と、それから喜代鶴と、この三人には、果してどんな關係があつたものだらうか。

その日、事件發生の現場たる例の逢魔ヶ淵の附近では、しばらく土地に姿を見せなかつた臨山巡査が、ひよつこり東京から戻つて來ると一緒に、佐野町の本署からも數名の係官が出張して來て、甚だ興味のある一つの作業が行なはれた。

村の漁師が狩り集められて、この漁師達に、

「海の底を探して見るんだ。皆んな、飛び込んで見る。」

かう、簡単に吩咐けられたのである。

漁師達は、何のことだが判断がつかかなかつたに違ひない。水面のトロリと静まつた蒼さ深さ。

そこは、ふだんだと、飽取りにすら入つたことのない薄つ氣味の悪い淵であるが、警察の命令とあつては仕方がない。

漁師達は、ドボン／＼、水煙りをあげて淵へ飛び込み、足の裏を返して水面を蹴ると、激しく水をかきながら、一樣に海底目がけて沈んでしまつた。

しばらく泡が立ち、波紋が大きく揺れてゐる。

漁師は、二人か三人づつ、潮を苦しげに吐いて上つて來ては、

『何もありませんえだ。カイズとベラが、うんとこさ泳いでをりますだ。』

そんなことをいふ。

岩の出つ張りに腰を下ろして、ちつと漁師の掃海作業を眺めてゐた脇山巡査は、かうした漁師の報告を聞く度に、少なからず不安さうな眼附をしたが、そのうちに我慢が出来なくなつたと見えて、自分も服を脱いで海へ飛び込まうとしたほどである。

筋骨の逞ましい若い漁師が、しかし、第何回目かに海から上つて來ると、その漁師は息を切れ／＼叫んだ。

『あつた／＼。ありましただ。深いとこだし、昆布の蔭でよく判んねえ。でも、何か黒い大きなものが沈んでゐますだ!』

立會ひの係官達の間では、ドツと、何かどよめきのやうなものが感じられた。

漁師達は、すぐその海の上の一點に集合された。

それから、數回一同が潜つて行つたあとで、丈夫な麻のロープが海底へ下ろされた。

やがて、ロープがピンと張り切つて、その黒い大きなものが、徐々に水面へ引き上げられると、

『やア……』

誰も彼も、溜息を洩らして眼を見張つた。

引上げられたものは、明らかにもう人の死體だつた。

はじめに水面から脚の方が出たが、その脚は、半ズボンに靴下、さうして地下タビを穿いた脚だつた。岸まで引き寄せると、長く水中にあつたため、多少色合は違つてゐるが、茶色の背廣を着てゐることも判る。それは兇賊押野の死體だつた。しかもその押野の死體は、首に細引を巻きつけられてゐた。明らかに、絞殺死體だつたのである。

脇山巡査は、そばへ來て立つて、ちつと死體の顔を覗いてゐる。

うしろから、佐野町の警察署長が、満足氣に臨山巡査の肩を叩いた。

「臨山君。こりや大手柄だつたな。」

「はい……」

「僕も君に、お禮をいはなくちやならん。押野が、こんな手近な、しかも海の底にゐるのだとは思はなかつたよ。見たところこりや他殺だね。」

「はう……」

「他殺だとすると、これも君の推測してゐた通りだ。残る問題は、犯人が誰かといふことになるが……」

「犯人は、春木梅之助といふ男でござります。あの男の靴を、私は前に調べてあります。あの男をすぐつかまへて、一緒に、長塚さんとこの奥さんもつかまへて下さい。」

「共謀かね。」

「共謀だと思ひます。喜代鶴といふ藝妓の申立てで、春木が、近頃喜代鶴との間に別れ話を持ち出し、それといふのが、春木は長塚さんのやつてゐた機械店の店員で、いつか主人の奥さんとの間に、變な關係が出来たためだつちふことが判つてゐます。詳しいことは、二人をつかまへて來たら、もつとハツキリしますべえ。」

春木が長塚氏の眼を偷んで、綾子夫人との間に忌まはしい關係を結んでゐたといふ。

だが、それならば、なぜ二人が共謀で押野を殺したといふことになるのか……イヤ、それよりも、當の長塚氏が先に殺害されたことは、こゝで押野が殺されてゐたことと較べて、どんな關係になつて來るのか、まだ殆んど何も説明されない。

が、臨山巡査は、總てもう解つてゐるといふ顔だつた。

さうして當局は、即刻手配にとりかゝつて春木梅之助と綾子夫人の逮捕に向いた。

事件後、綾子夫人は、別荘を引揚げて東京に歸つてゐるし、春木も無論東京にゐる。同じ日の夕方までに、二人共、難なく取押さへられてしまつたのだつた。

## 眞 相

春木梅之助は、顔立のキリ、と引きしまつた、色の淺黒い美青年である。

彼は長塚機械店の店頭から、自分の住むアパートへ歸らうとしたところを、ふいに警官に同行を求められると、サツと顔を蒼くして、矢庭にバラ／＼逃げ出したといふ。彼は、警察へ連れて來られてから、はじめは極端に白ばつくれた顔附をしてゐて、なぜ自分が拘引されたか、一向に呑み込めぬといふ體を装つてゐた。

が、同時に、綾子夫人も拘引されたと告知知らされ、更にまた穿いてゐたボツクスの網上靴を脱がされて、この靴が、もうのつびきならぬ證據になつたことを知つた時、急にガツタリと首を垂れてしまつた。

靴は、先きに脇山巡査が、別荘裏手の林の中で見つけられた靴痕と、ピッタリ一致したものである。

『では訊くが、君は、逢魔ヶ淵の別荘で長塚氏が殺害された當夜、別荘へ行つて綾子夫人と蠲曳をしてゐたに違ひあるまい。當夜別荘へ行かなかつたとしたら、ほかにどこにゐたか、詳しく當夜の行動を申立て、見給へ』

かう係官に言はれた時、殆んど返事も出来なかつたし、

『この通りだ。事件直後発見されたこの疑問の靴痕は、確かに君の靴の痕なんだ。靴の痕が、行きには地上へ深く入り込んでゐるし、歸りは薄く淺くなつてゐる。つまりこれは君が別荘から、その晩何か重いものを擔いで出て行つて、歸りにはその重いものを、どこかへ置いて来てしまつたといふことを證明してゐる。重いものは、何だつたね。擔いで行つたものが何だつたか言つて見給へ。——言へなければこちらで言ふが、それこそ押野の死體だつたらう。押野の死體を、君は逢魔ヶ淵の底へ投げ込んで来たのだらう。どうだ、違ひがあるか。』

激しくきめつけられた時、これにも返事が出来なかつた。

一方では、綾子夫人の訊問があり、調べは殆んど夜半までかゝつてしまつたが、遂に二人共泥を包み切れずして、ボツ／＼と自白し出したことこそは、實に驚くべき奇怪事である。

二人の申立てを綜合すると、大體それは次のやうなことになる——。

はじめの推測通り、また、藝妓の喜代鶴の口から脇山巡査が聞き出して來てゐた通り、梅之助と綾子夫人とは、この半年ほど前からして、許すべからざる關係に陥ちてゐた。

事件當夜、主人長塚氏は東京へ行き、入れ代つて東京からは、梅之助が別荘へ來てゐたのである。

主人の留守を幸ひとばかり、二人が不義の戀に酔ひ痴れてゐると、突如そこへ歸つて來たのが長塚氏だつた。長塚氏の方は、かねて二人の間に疑ひの目を向けてゐて、當夜は、一旦東京まで行つたものゝ、梅之助が東京にゐないのを確かめると、ハツと思つて別荘へ歸つて來たものだつたらう。

『あたし、主人の顔を見て驚きました。どうしたらよいか困つてしまひましたが、その時主人は大層怒つて、その揚句が恐ろしい格闘になつたのです。あたし、手出しも出來ず、ハラ／＼してそれを見てゐただけですけど、主人は、しまひに刃物まで持出しまして。』

綾子夫人は、言葉も途切れ／＼申立てたが、別荘内で、實際に格闘のあつたのは、兇賊押野と長塚との間にあつたのではなくて、長塚氏と梅之助との格闘であつたらしい。

格闘中、兇器は、梅之助の手へ奪はれた。

そして梅之助は、滅多矢鱈に長塚氏に突いてかゝつて、到頭長塚氏を悶絶させてしまつた。

はじめは、殺すまでの氣持ではなかつたのかも知れず、しかし、長塚氏がぐつたりとなつたまま、もう起上ることも出来なくなると、二人は極度に狼狽してゐて、さて善後策をどうしたらよからうかと相談中、ふと氣附くと、そこへノツソリと異様な人物が侵入して來てゐる。

それこそ、兇賊押野だつた。

押野が、これは別荘のそばを通りがかりで屋内の騒ぎに氣付き、そこは度胸のある男だから、すつと申へ忍び込んで來てゐて、もうすつかりと様子を見てゐたのだつた。

それについて梅之助は、次のやうに申立ててゐる。

「僕等は、どうにも仕方がありませんでした。押野は、僕等の顔を見てニヤ／＼笑ひ、イヤどうも、お前さん達も悪黨だね。主人の眼を偷んで密通して、しかもその主人を殺しちまふつてのは大したもんだ。えゝと、時にどうだね、俺が見たことを、これからよそへ行つて喋つたら、お前さん達も無事ぢやゐられまい。俺の口を塞げとくために、何とか色を付けて貰ひてえもんだね

……かういつて僕等を脅迫し始めたのです。弱味があるだけに、僕等は、押野のいふなりになるよりほかありませんでした。欲しいといふだけのものは呉れてやるつもりで、しかしその時に、ふつと氣がつかしました。毒喰はゞ皿まで、この賊が現れたのを幸ひ、長塚さんを殺したのが、この賊の仕業であつたといふやうに、世間へ見せかけることは出来まいかといふことです。思ひつくとそれはいゝ考へらしくて、結局私は、その通りやつて見ずにはゐられませんでした。」

主人長塚氏を殺してしまつた経験が、急にこの青年の氣持を、圖太く猛惡なものにしてしまつたのである。

彼は、度胸が据わつて來た。

綾子夫人に眼配せをして、それから先づ押野を油断させてしまはうと企らんだ。

押野は、いゝ氣になつて、しまひには、酒を出せとまでいつたさうである。

さうしてその油断を見澄まして、梅之助は急に押野の首へ細引を巻きつけ、一息に絞殺してしまつたのであつた。

それからあとのことは、も早、誰にも想像のつくことであらう。間もなく押野の死體は、逢魔ヶ淵の底へ投げこまれ、梅之助だけはこつそりと別荘を立去つてしまつて、さて次に綾子夫人が、臨山巡査のゐる駐在所まで、息を切らし／＼駆けつけたといふ順序である。はじめ、彼等の

計畫は、申分なく成功しさうに見えた。鳥の羽根など出て来たため、賊が有名な脱獄囚だったと判つたことも都合がいゝ。當局は一時、すつかりと騙されてしまひさうになつたのである。

朴訥な田舎巡査ではあるが、脇山老人といふものがゐなかつたら、事件は恐らく、押野の行方が永久不明になつたといふこと以外、少しも進展しなかつたらう。

脇山巡査こそは、この事件で第一の功勞者である。

彼は、この美しい顔附をした二人の男女、しかも恐るべき殺人の血で、両手を眞赤に染めてゐた筈の二人が、やがてすつかりと告白をしてしまつた時に、反つて氣まり悪げに頭を掻いて言つた。

『イヤ、なアに、手柄を樹てたなんて言はれると困つてしまふだ。僕はね、たゞはじめに長塚さんの殺され方が、少うし變だといふことに氣がついたゞけだよ。押野が長塚さんを殺したといふ。けれども、押野ともいはれる男だつたら、長塚さんを殺すのに、あんなに不細工な、脇中に三十何ヶ所も傷をつけるやうな、ヘマなやり方をする筈はなさうなもんだと思つたゞよ。押野にしちや、えらく不器用なことをしたもんだと思つてゐると、そこであの靴痕を見付けたわけでもその時にや、まだ何もハッキリしたことは判つちやゐねえ。春木といふ男が、長塚さんの奥さんと、どんな關係になつてゐるのか、それだつて判らねえでゐた始末だから、それで僕は

東京へ行つて、一生懸命春木のあとを付け廻し、何か嗅きつけようとしてゐたわけだ。毎晩、寝もしなかつた。春木の泊つてゐるアパートを、今に何かあるだらうと思つて見張つてゐると、そこへあの喜代鶴といふ女が出て来てくれて、これではじめて、春木と綾子夫人との關係が判つただよ。考へると、あの藝妓は、今度の事件ぢや一番可哀想な女だ。春木の奴、藝妓と別れて、金持の未亡人の綾子夫人と、一緒にゐるつもりでゐたに違えねえだ。さういふ不實な男とも知らないで、あの女ア、男のために、學資まで貢いでゐたことがあるといふんだかな。

その喜代鶴にあてゝ梅之助は、あとで獄中から、長い謝罪の手紙を書いて出したといふ。男の悔悟が、せめて喜代鶴にとつては、かすかな慰めであつたことに違ひはない。



水底の怪トランク事件

## 骸骨研究家

『おい、あの犬を見るよ。』と、人のよささうな若い農夫がいふと、

『ウンあれか、可哀相にナ。——ありや、シャロットテ夫人の飼犬だんべ。』連れの肥つた農夫も、ヒヨツコリ立停つて答へた。

佛蘭西のリヨン市から程遠からぬところに、舊い石造の僧院風な建物があつて、その、暗く重々しく廢墟のやうな感じを與へる建物には、米國人のダンカンといふ男が住んでゐたが、今し

二人の農夫は、恰度そのあたりを通りかゝつたのである。

シャロットテ夫人の飼犬といふのは、骨と皮ばかりに瘦せ細つたみすばらしい犬で、向ふの廣つ

ばを、ヒヨロ／＼しながら駈けぬけて行く。

若い農夫が、また話しかけた。

『あの犬つころ、もうまる／＼三週間ぐらゐ、ろくにものも食べずにゐるつてからな。』

『さうだつてヨ。俺もその話は聞いてるだ。シャロットテ夫人がゐなくなつてから、犬の奴め、夫人のあとばかり探し廻つてゐる。夫人のゐねえのを悲しがりやがつて、ほかの者が何をやつても食べねえちゆことだぞ。犬なんて、同じ畜生のうちでも、情の深えもんだかな。』

「シャロット夫人も罪つくりな女だよ。男を連れて逃げたのはいゝが、ついでに、犬も連れて行つてやりやいゝのにさ。」

「ウツフツフ。好いた男との駆落に、まさか、犬まで一緒にといふわけにもいかなかつたんだべ。あの女の逃げた先きは、まだまるつきり判らねえのかな。」

「アンでも、伊太利邊へ逃げたかも知んねえちゆだが、ハツキリしたことは判んねえだよ。ありや、ふんとに綺麗な女だつたナ……」

噂の主シャロット夫人は、米國人ダンカン氏の妻である。ダンカン氏は、土地の人にはせると、骸骨の研究家だなどといふものもあつたが、實は一種の考古學者で、そこから界限に残存してゐる先史時代の遺物——石斧だとか骨壺だとか墓標だとか、さういふものゝ蒐集家だつたらしい。ダンカン氏の邸には、氏の仕事を助ける意味で、米人のマーセルといふ秘書役が備はれてゐて、この秘書役とダンカン氏夫人シャロットとが、もうこの數週間前から、ふつつりと姿が見えなくなつてゐる。シャロット夫人は、良人のダンカン氏より二十も年が若かつたし、秘書のマーセルも若く秀麗な容貌をもつた青年である。二人は、ダンカン氏の眼を偷んで、どこかへ駆落をしてしまつたのだといふ噂が、世間へもパツと擴がつて來てゐたのだつた。

「俺はシャロット夫人を、三度ほど見かけたことがある。若いも若いし、美しいも美しいが、秘書と駆落をするなんて、そんな不眞面目な女でもなさうだつたがナ……」

「アーに、人は見かけによらねえもんさ。秘書のマーセルだつて、見たところはひどく堅造だつたよ。」

二人の農夫は、ダンカン氏の住んでゐる舊い石造の建物を眺めて、何といふことなし、ホツと溜息みたいなものを洩らしたが、その時急に、

「おやッー」  
とばかり眼を見張つた。

石造の建物の表門からは、今、噂をされたダンカン氏が、ニユツと姿を現したのである。

ダンカン氏は、脊のひよる高い、そして頭の毛の眞白な、いかにも學者型の老人である。ダンカン氏は、細君がゐなくなつて以來、ひどく無口で不機嫌になつてゐたさうだが、門から出て來て、道のはたに立つてゐる二人の農夫の方を、ギロリと睨むやうに眺めた眼附が、さながら狂人のやうに物凄く。

「おつかねえ人だナ。ダンカンさんといふ人も——」

農夫達は、一睨みされたばかりで、縮み上るやうな氣持だつたが、見てゐるとダンカン氏は、農夫達には別に言葉もかけず、向ふの草つ原をノソリノソリと横切つて行つて、ヒユウ／＼と口笛

を鳴らし始めた。

しばらく経つた時に、口笛を聞きつけて、どこからともなく走つて来たのが、さつきの瘦せた犬である。

ダンカン氏は、何か手に食べものを持つてゐて、それを犬の方へ投げてやり、まだ地べたへしやがんで両手を出して、幾度もおいで〜をやつてゐる。犬は、シャロット夫人には馴付いてゐても、ダンカン氏にはあまり馴れてゐないらしく、容易なことではダンカン氏の身近へ来なかつたが、そのうちに農夫達は、

『やア！』

吃驚して、叫び聲をあげた。

ダンカン氏は、到頭、犬を手馴づけたらしい。犬がやつとこさダンカン氏の膝のところまでやつて来ると、ダンカン氏の瘦せた長い兩腕は、ギョツと犬の胴中をつかまへた。そして犬は、眼よりも高く持上げられ、と見る間に、ドサーリツ、カ〜パイ、地べたへ投げつけられてしまつた。

『ギヤツ！』

といふ苦しげな犬の悲鳴。

そして、身動きも出来ず、地べたへのびてしまつた犬の軀の上で、子供の細跳びをするやうな恰好に、ヒョコン〜、飛んだり跳ねたりしてゐるダンカン氏。

ダンカン氏は、やがて、足をあげてポウンと犬の軀を蹴つた。さうして、ベツ〜と唾を吐くやうにして、悠々草つ原を横切つて来、大股に自分の邸のうちへ入つて行つてしまつた。

『ダンカンさん、犬を殺しちまつたやうだぞ。行つて見べえか。』

『ウム。』

あとで農夫は、怖々とそこへ行つて見たが、思つた通りあの哀れな犬は、血へどを吐いて死んでゐる。

『あんまり人に馴れねえから、ダンカンさん、怒つたんだナ。』

『さうかも知んねえ。犬を見ると、逃げた奥さんのことを思ひ出して、餘計に腹が立つといふやうな寸法。』

農夫達は、互ひに顔を見合して、まを偷み視るやうに、夕闇の迫つたダンカン氏の邸の方を眺めてゐた。

### シャロットの父親

事件は、確しる、戀愛沙汰である。

少なくとも戀愛沙汰以外に、何の變哲もない事件だと見たものである。

若くて美貌な人妻シヤロツテとマーセル秘書との墮落は、かくして世間への噂がひろまりながら、その墮落の裏面にこそ、どんなに怪奇な謎が秘められてゐたことか、まだ誰も氣のついた者はなかつただらうが、さてしかし、前の章に述べたやうなことがあつてから數日経つと、問題は、俄然異様にこじれて来て、遂に忌まはしい警察沙汰にまで、急速な事件の進展を見たといふのが、ある日のことリヨン市にある警察へは、一見して相當身分あり氣な、シヤロツテ夫人の父親だと稱する人物が、署長に面會を求めて、ふいに出現したからであつた。

シヤロツテ夫人の父親は、名前をラレイヌ氏といつて、リヨン市からは相當離れたところにある某地の、銀行業か何かをやつてゐた人である。

ラレイヌ氏は、警察署長に會つた時、とりあへず先づ、自分の娘のシヤロツテのこと、娘の婿ダンカン氏のことを一通り話し、更に、シヤロツテとマーセルとが墮落をしたらしいことについても、大體その土地で噂されてゐた通り打明けて後、しかしその墮落については、何ともいへず變なことがあるのだといつた。

「實は私は、娘と若い秘書とが墮落したといふことを聞いて、一時、ひどく立腹しました。兎も

角、婿に會つて見る必要があると思ひ、早速ダンカンの邸へ出向いたわけですが、訪ねて行つて見るとダンカンは、ひどく不機嫌でいら／＼してゐて、それはまア、妻に逃げられたあとなのですから、一應は無理のないところだつたかも知れませんが、娘が逃げて以來、娘の居所を探して見たのかと訊ねて見ると、ダンカンのいふには、あんな不埒な妻のことなど、別にもう行方を探す氣にもなれない、伊太利方面へ逃げたといふ噂もあつて、しかし放つたらかしてしてあるのだといふやうなことでして、彼は、シヤロツテについては、もう／＼、話をするのも不愉快だといふ顔附になつてしまひました。

私は、シヤロツテの父として、シヤロツテが不埒なことを仕出來したのは、何に致せ不面目の至りだし、といつて、婿が、ゐなくなつた娘のことを、そのままで放つたらかしてゐる態度が、少々氣に入らぬやうにも思ひましたが、やがて婿のところは匆々暇乞ひを致しまして、さてそのあとで村のホテルへ立寄つて晝食をする氣になり、するところこのホテルで、ダンカンについての妙な風評を聞込んでしまつたのです。

村の人のいふところだと、ダンカンは、娘がゐなくなつてから毎晩のやうに、シヨベルや鉄を肩にかついで、こつそりとどこかへ出かけて行くのだとのことでした。どこへ行くのか別らないが、それについてダンカンの異様な姿を見かけた村のものが、ダンカンの邸で使つてゐる女中を

つかまへ、それとなしに譯を訊いて見ると、ダンカンはその女中に向つて「イヤ、俺は、何も怪しいことをしてゐるんぢやない。村の近くのある場所、古代の陶器や石板畫を發見したんだ。それを秘密に掘り出したと思つて、毎晩そこへ出かけて行くのだ」と、ひどく曖昧な口調で説明したことがあるさうですが、村のうちでは誰もまだ、ダンカンがどこでそんな古代陶器や石板畫の採掘にかゝつてゐるのか、確かめたものはありません。ダンカンの行動が、變にかう怪しいといふ風評が、ボツ／＼湧いて來てゐるのです。

なほ村の人に訊いて見ると、シヤロツテとマーセルとの駈落は、誰も彼も知らぬものがないさうで、しかし、シヤロツテやマーセルが、いつ、どんな風にして、またいかなる服装をして、村を立去つたのかといふ問題になると、誰一人、満足な返事の出來るものもなく、つまるところ彼等二人は、いつからともなく村のうちから姿を消してしまつて、しかしそれが、村を立去つたのだといふ確かな證據は、何一つ残つてはをりません。二人一緒に姿が見えなくなつたのだから、二人は駈落をしたに違ひないといふ……なるほどそれも有り得ないことではなく、といつてかういふ問題は、そんなに簡単な理窟で總てを判斷してしまつてもよいものでせうか。私は、何やいや、不安を感じずにはをられません。彼等の行方不明が果して駈落であるかどうか、警察の手によつて調べて戴けたらと思ふのですが……』

警察官には、警察官特有の第六感といふものがあるといはれてゐる。

警察署長は、ラレイヌ氏の話を聞いてゐる途中で、もうひどく緊張した顔附になつてゐた。そして、間もなくラレイヌ氏が歸つて行つたあとで、卓上のベルを押して二名の配下を呼び寄せ、何か低聲に命令を下した。

ルヴァロオといふ、子供のやうに快活な探偵。

それからヴォルテールといふ、神經質な顔附の探偵。

二人は即刻自動車を飛ばして、ダンカン氏の住んでゐる村を訪れたのだつた。

### ダンカン氏の健康状態

「ところで、順序は、どんな按配にやつたものかね。僕は、問題は何しろ、ダンカン氏の周圍に蟠まつてゐるやうな氣がする。」

「ウム、それは僕も同感だ。しかし、初つ鼻からダンカン氏にぶつかつて行くのも考へものだらう。その前に、村のうちで、何か聞込みを拾つて見ようぢやないか。」

「賛成だ。ラレイヌ氏がダンカンについて、怪しい噂を聞いたといふ、村のホテルへ行つて見ようぢやないか。」

探偵達は、村の入口へ着いた時に、そんなやうな申合せをした。

そして、先づ車を、村のホテルの前へ停めて、田舎へ呑気なドライブに來たといふやうな顔附、元氣よく中へ入つて行つて、簡単な食事と酒とを注文した。

ホテルには、主人と主人の娘と、二人ゐるだけである。探偵達は、間もなくその主人と、馴れ／＼しく話し始めた。

「どうだね、親父さん。この頃は景氣がいゝのかい。」

「へい、有難うございます。お蔭様でボツ／＼やつてゐますんで。」

「僕等はね、リヨンから氣紛れでブラリとやつて來たんだ。こゝは静かだし景色がいゝし、滅法氣に入つてしまつたんだが、村のうちに、何か途方もなく面白いといふやうな話はないもんかね。」

「へ、、、、別にどうも、面白いといふほどのこともないんですが……」

「何かかう、色つばい筋の噂話ぐらゐ有りさうなもんだがね。——うん、さういや、思ひ出したよ。この村にや、考古學者のダンカンといふ人がゐるだらう？」

「へい。ダンカンさんならをりますよ。旦那方は、ダンカンさんの御知合なんですか？」

「うーん、知合つていふ譯でもないよ。たゞ、ダンカン氏について、一寸、面白い話を聞込んだ

だけさ。あの人の細君、まだ歸つて來ない様子かね。」

探偵達は巧みに話を、問題の要點に觸れさせて行つた。

ホテルの主人は、相手が警察の者だとは氣づかずに、そのあと漸く雄辯になつて、ダンカン氏やシャロツテ夫人の蔭口を利き始めたが、この時主人の話したことは、前にラレイヌ氏が警察へ來て話したことと大差はない。

シャロツテ夫人とマーセルとは、矢張り駈落をして伊太利邊にゐるものと信じられてゐた。また、ダンカン氏が、先史時代の遺物を、夜になつてから掘り出しに行くといふ話も、その探掘の場所がどこだとも知られず、ただ、何となく變てこだといふぐらゐのことに過ぎなかつた。

探偵達は、期待に反して、大して耳新しい聞込みもなかつたので、内心落膽をしながらも、やがて食事も済み、勘定を拂つてホテルを出ようとした時、食器を片附けに來たホテルの主人が、最後にいつた言葉だけ、どうやらひどく意味あり氣な事實として、記憶のうちへ刻み込んで置くことが出來た。

ホテルの主人はいふのである。

「まあしかし、ダンカンさんも、相當變つたところのある人には違ひないんですよ。シャロツテ夫人に逃げられてから、滅法無口になり不機嫌になつたつていひますがね、その癖奥さんのゐな

くなつたのは、どういふ譯のもんでせうか、身體の健康上のことについて、大層工合がいゝんだつてことを、負惜しみかも知らねえがいつてるんださうです。——奥さんがゐりや身體の工合が悪いし、ゐなけりや丈夫になるといふのは、何しろ年の違ふ夫婦でして、一方は三十才になるかならぬかの女盛り、一方は、土ん中の骸骨やなんか掘り出すことばかりを樂しみにしてゐる老學者。シャロット夫人も、相當しつこいところのある女だつたといふことが判りまさア。ダンカン氏が使つてゐる女中の話だと、ダンカン氏は、シャロット夫人がゐなくなつてから、食事の分量が急にひどく増して來て、朝飯も晩飯も、結構二人分は、ペロリと平らげるやうになつたつていふことですからね。』

この何気なく話された言葉のうちに、どれだけ重大な意味が隠れてゐたことか、もとよりそれは、話をしたホテル主人ですら、一向氣づかずゐたほどのものであつたが、實は後になつて見ると、以上述べられた事實のうちには、ハタと横手をうつて思ひ當らねばならぬやうな事柄が、少なくとも一つだけ、しかもそれがかなり明瞭な形で以て、ちやんと横たはつてゐたのであつた。

『シャロット夫人が、しつこい女だつたといふのは面白い話だね。年違ひの夫婦の間では、よくかういふことはあるものだよ。』

探偵ヴォルテールがいふと、ルヴァアロオは答へた。

『ウム。それは僕も聞いたことがあるよ。しかし、細君と秘書とが駈落をしてから、急に二人分も食事を多くするやうになつたといふダンカン氏も變な男だ。——ところで、今度はどうしよう。ダンカン氏に直接會つて見るのだが、矢張りまだ、警察の者だつてことは氣取られぬ方がよささうだね。』

『同感だ。僕が一つ、お仲間の考古學者のやうな顔をして、ふいに訪問をして見ようか。君は、一緒に行くから。』

『イヤさういふ風にして行くんなら、ダンカン氏に會ふのは、君に引受けて貰ふとして、僕は、自動車の運転手といふやうな體裁がいゝだらうな。ダンカン氏と君とが會つてゐるうちに、僕は邸の外で待つてゐて、何か情報を集めて置くよ。』

相談が纏まつて、愈々彼等はダンカン氏の邸へ赴くことゝなつた。

## 恐怖の新発見

考古學者に化けてダンカン氏と會つたのは、ヴォルテール探偵だつた。

探偵はダンカン氏がこの土地で、古代の陶器や石板畫を採掘蒐集したといふ噂を聞込んだの



で、それを見せて貰ふために、わざ／＼訪ねて来たのだといふ、巧みな嘘を言拵らへたが、實のところこの時の兩者の會見は、大して効果のあるものではなかつた。

ダンカン氏は、この賈の考古學者を格別疑つた風でもないし、さりとて、喜んで迎へたといふほどでもない。矢の根石だとか石斧だとか、怪しげの彫刻のついた古代の食器だとか、そんな蒐集品を三つ四つ見せてくれて、しかし、最近に採掘中だと聞いて来た古代陶器のことなどは、探偵が一寸それを仄めかして見たばかりで、忽ち不機嫌な顔附になり、はじめてこの賈考古學者を、警戒するやうな態度さへ現すやうになつた。警戒されては工合が悪いし、家庭内の醜聞——シヤロツテ夫人の問題など、どこからも話し出して行く緒口がない。

ヴォルテール探偵は、やがて追ひ出されるやうにして、ダンカン氏の邸に暇を告げた。

そしてこの時に、外で待つてゐたルヴァロ探偵の方は、同僚を自動車に乗せて走り出しながら、滅法元氣のいゝ聲で叫んだ。

『どうだつたね、ダンカン氏の工合は？』

『ウム。残念ながら、大した收穫もなかつたよ。奴さん、かなり神経質な老人だ。眼附がひどく鋭くて、時々、ギロリと人を睨む癖がある。考古學者だなんていふよりは、矢つ張り骸骨研究家とでもいつた方が、一段と相應しい名前だよ。僕の方は失敗だが、君の方は何か掴んだかい。』

『掴んだよ。滅法、手懸りになりさうなものを掴んだのだ。君を待つてゐる間に、ダンカン氏の自動車が置いてあるガレイチへそつと入つて見ると、その自動車が、掃除もろくにしてなくて汚れたまゝになつてゐる。タイヤに、泥や水草が、ゴテ／＼とからまりついてゐるんだよ。』

『ふーん。泥や水草に、何か意味があるのかい。』

『女中に鼻薬を握らせて、いろ／＼訊いて見たんだが、つまり、次のやうなことだけ判明してゐる。ダンカン氏は、もう三四週間も前のことだといふが、何か大きな荷物を自動車で載せて、そつと邸を出かけて行つたことがあるさうだ。さうしてその時に、自動車が歸つて来たところを見ると、タイヤが泥まみれでひどく濡れてゐたんださうだ。天氣の悪い日ぢやなかつたといふし、自動車が、水草やなんかの生えてゐる、河とか沼とか湖水とかの中を走つたことは確かだと思ふ。二哩ほど離れたところに、小さな湖があるといふことだからね、そこへ行つて見ようと思ふのさ。』

自動車は、平坦な田舎道を、まつしぐらに駆け抜けて行つた。

さうして間もなく、水面が鏡のやうに光つてゐる湖の縁へ着いた。

岸に沿つて、車をあちらへやつたりこちらへやつたり、そこで何かの證據を探し出すといふことは、かなり困難な仕事に見えたが、やがてのことに探偵達が見つけたのは、湖の底が、大層

浅くなつてゐる箇所である。

「ヤツ、あるぞ〜。こゝの水底の泥には、ハツキリとタイヤの跡が残つてゐる〜」

「ウム、こゝから考古学者先生、車を沖の方まで乗り進めたんだな。よオし、我々も一つこの通りにやつて見よう。」

彼等は再び自動車に乗り、その浅瀬を、四分の一哩ほど沖へ進んだ。

『どうやら、大分深くなつて来たぜ。こゝからはもう進めやしない。』

ルヴァロオ探偵は、あたりを見廻して呟いたが、それからすぐに靴を脱ぎ、シャツ一つになつて、勇敢に湖の中へ身を躍らした。

『寒いだらう。』

『なアに、大丈夫だ。學者先生が邸から持出したといふ大きな荷物が問題だからナ。』

ルヴァロオ探偵は、急にそこから深くなつてゐる沖の方へ、拔手を切つて遊びながら、時々、水中へもぐつては、何かを探し出さうとしてゐる。

案外ぢきに、彼は、

『あつたぞオ〜』

と、勝ち誇つて叫び聲をあげた。

そして、同じ場所で、幾度か水面を蹴つては水の中へもぐりこんで行き、また息をしにボカリと水面へ浮かび上り、そんなことを、五回も六回も繰返した。

到頭、自動車の置いてあるところまで、疲れ切つて歸つて来た彼は、寒さのためにガチ〜身體をふるはせながら、眼附だけは、燃えるやうに昂奮させて叫んでゐた。

「水の底に、大きなトランクが沈んでゐるんだ。人間の死體が十分入るくらゐの大きさだが、蓋を開けて見ることも出来ないし、僕達の方ちや、陸へ引揚げるわけにも行かない。——まア、大発見だ。トランクの中に死體以外のものが入つてゐる筈はない。明日にでも、人を連れて来て引揚げさせることにしよう。中に、誰の死體が入つてゐるのかは判らないが、多分僕は、シャロット夫人ぢやあるまいと思ふ。秘書のマーセルが殺されて、シャロット夫人だけは生きてゐると思ふのだ。なぜつて、ダンカンには、二人分の食事をするつていふぢやないか。そいつは、ダンカンが食べるんぢやない。自分が皆んな食べてしまふと見せかけて置いて、實は半分だけを隠して置き、どこかに幽閉してあるシャロットのところへ運んで行くのだ。——ウン、こゝまで事情が判つて来ると、ダンカンを逮捕してしまつてもいゝんだが、待て〜、さうするとダンカンめ、シヤロット夫人を幽閉してある場所を、すぐに打明けて話さないかも知れん。よオし、今夜のうち、奴が古代陶器を採掘してゐるといふ、その場所を突き止めてやらう。シヤロット夫人を、き

つとそこに幽閉してゐるに違ひないんだ！』  
意氣軒昂二人の探偵は、その恐るべき秘密の横たはつた湖の縁を立去つた。  
リヨン市の本署へは、電話で大體の捜査報告をし、トランク引揚の仕事をやつて貰ふ手筈を打合せると同時に、自分達は、考古學者ダンカンの邸附近へひそかに取つて返し、この同じ日のうちに、事件を徹底的に解決してしまはうと肚を決めた。

### 窖の悪鬼

あとで思ふと、湖の底でトランクを見つけた時、探偵ルヴァロオやヴォルテールが、もう的確に掴んでしまつたと思つた事件の輪廓は、まだ、多少ともこの戦慄すべき犯罪の真相とは、喰ひ違つてゐた點がないでもない。

が、それにしても事實は、彼等がかうやつて推理したり想像したりしたところよりも、なほ遙かに殘虐であり非道であつたといふだけのこと。この事件に於ける兩探偵の功績といふものは、まづ最も偉大だつたといつてもよいものがあるだらう。

その夜二人の探偵は、夜ももう大分遅くなつてから、村の人の噂にあつた通り、ダンカン氏の邸から、肩にシヨベルと摺嘴とをかついだ黒い人影が、ノソ／＼と表の街道へ出て来るのを見

た。

探偵達が、ちつと身を伏せて隠れてゐるとも知らず、その人影はちきに探偵達の鼻の先きを通り過ぎて行つたが、月光で、ハッキリとその横顔が見える。

それは、紛れもなくダンカン氏だつた。

そしてダンカン氏は、シヨベルや摺嘴のほかに、何か紙で包んだ驚張つたものを、持ちにくさうに肘でかゝへて持つてゐて、それが例の二人分の食事の半分——幽閉してあるシヤロツテ夫人に與へるための、秘密な食量であらうといふことが、すぐに推察されるのであつた。

『學者先生、まだまるつきり、我々の手が廻つてゐることを、氣がつかないでゐるらしいね。』ルヴァロオ探偵は、面白さうに同僚の耳へ囁いた。

『晝間、僕が贖考古學者になつて行つた時は、すんでのこと警察の者だと看破かれたやうに思つたか、案外奴さん、呑氣なんだね。さア、先生の古代陶器發掘作業つてのを、ポツ／＼拜見に出かけようぢやないか。』ヴォルテール探偵も、ブルツと武者ぶるひしながら答へた。

ダンカン氏は、街道を半哩ほど眞つ直ぐに進む間、時々立停つてはあたりを見廻し、誰か自分を尾行するものがあるかはしないかと、さすがに注意したやうである。探偵達が、農家の蔭へ身をひそめたり、濕つた草地の中をむく／＼もちのやうにして通つて進む間に、ダンカン氏は、突然身

を躍らして、今まで歩いてゐた街道を右手へ外れたが、そこからはもう、石のゴツ／＼飛出した丘陵や、身を隠すに都合のいゝ雑木林の連続である。

「見る。先生は、カンテラをつけるぞ。」

ルヴァロオがいつた時、約百米ほど先きにゐたダンカン氏は、シヨベルと鶴嘴とを肩から下ろし、地べたへしやがんで、マツチをすつたやうである。

見るとその近所には、子供の身の丈ぐらゐの石が、ニヨキ／＼笥の生えたやうに林立してゐて、その石の柱の上に、また別の平たい石が屋根のやうになつて載せられてゐるところもある。

「恐つそろしく澤山の石があるね。あの石はどういふ石だい？」

とルヴァロオ探偵は訊き、

「うん、あれか。あれはね、多分、非常に古い時代の墓石なんだよ。確かドルメンとかいふ名前と呼ばれてゐるものだ。見給へ。ダンカンが、地べたから何か引上げたぜ。」

ヴォルテール探偵は、ギユツと同僚の腕を握りしめるやうにしていつた。

考古学者は、その時、点火したカンテラを石の墓標の上へ置いて、兩足を力一パイ地上に踏んぱり、平べつたい大きな石の扉を、グダグダと抱き起したところである。

その石の扉は、多分枯草に蔽はれてゐて、人眼につかぬやう、隠してあつたものだらう。

扉の下に、何があるかは、もう誰にでも推察が出来る。

ダンカンは、カンテラを掴みよせると、ちぎりに地上から姿を消したが、それは、石の下の窠へ入つて行つたものに違ひない。二人の探偵は、チリ、チリ、と窠の口へ肉迫して行つた。そして、あともう十歩ぐらゐといふところで、唐突にダンカンが、猛虎のやうな勢ひで、再びその窠から飛び出して来るのを見た。

ダンカンは、窠の中にて、地上を這ひながら近づいて来る探偵達の意音を聞きつけ、吃驚して様子を見定めに來たのである。

「危ない！ 氣をつける！」

探偵達は、互ひに叫んだが、その途端闇をつんざいて、激しい銃聲が二發鳴り響いた。そして、ピストルをなほも續いてぶち放さうとするダンカンの身體へ、ルヴァロオとヴォルテールとが、水雷のやうな素早さで躍りかゝつて行つた。

狂暴な老考古学者の持つてゐた武器を、十分に役立たせる暇を與へなかつたのは、探偵達にとつての大きな幸運である。

打つ、殴る、蹴る——。

古代の墓標を背景にして、死物狂ひの格闘は數十秒續いた。そして、

「ウーム。畜生！ これでもまだ抵抗するか！」

力の強いヴォルテール探偵は、ダンカン氏の首根つこを靴の底へ踏みこみ、腕を、ミリ／＼と關節が鳴るくらゐ、逆に振ち上げた。

探偵達の方も、荒々しく息を喘がせて、どうやらこの怪物を、身動きの出来ぬまでにしてしまつたのである。ピストルは、ヴォルテール探偵の手へうつり、ダンカン氏は、苦しげに口から泡を吹き出して、もう、抵抗しようとはしなかつた。そして間もなく探偵達は、まだカンテラの火がそのまゝ、瞬いてゐる審の中へ降りて行つて、半ばは彼等の豫想に的中し、半ばは豫想に反した光景を目撃した。

審は、もう数年前に、このあたりで先史時代の遺物が採掘されたあとだつたらう。それほど廣くはないが、優に頭を上げて歩くことが出来るほど天上が高く、また、奥行も相當の深さである。その中に、シャロット夫人は、息も絶え／＼になつて突つ伏してゐ、またその向ふに、秘書のマーセルが、これも半死半生で、荷物のやうに横たはつてゐるのだつた。

豫想の中したといふのは、シャロット夫人がゐたことである。的中しなかつたのは、マーセルまで、こゝに幽閉されてゐたことである。マーセルが生きてゐるとすると、湖の底にあつたトランクには、果して何が入つてゐることであらうか。

「確乎りしなさい。もうあなた方は助かつたのだ。さア、氣を確かに持つて——」

二人の探偵は、交る／＼聲を勵まして、この奇怪な囚人達に勇氣をつけた。

さうして、一人がダンカンの見張りをして現場に居残り、一人が、大急ぎで村まで駆けて行つて、農夫達を数名そこへ呼んで来た。

リヨン市の本署から、ダンカンの身柄を受取るための自動車が、朝の冷たい空氣を爽快な警笛の音で掻き亂しながら、漸くこの石の墓標が立ち並んでゐる場所へ到着するまでに、シャロット夫人とマーセル秘書とは、氣のゆるみが来たのだらう、幾度も眼を閉ぢてはウト／＼と眠りかけ、眠りかけるとすぐに、

「悪魔——人殺し……助けてえ……」

悪夢の中の讒言を喚き續けた。

## 眞 相

手に手を携へて、伊太利の方へ駆落をしたと信ぜられてゐた人妻と秘書とは、村のうしろにある山の中腹で、古代の塚の中へ、生きながら埋葬されてゐたも同じなのである。

數週間に亘る幽閉で、彼等は、古布のやうに衰弱してゐた。

病院へ連れて来て見ると、内臓の障害もひどかつたし、肌には、血が流れ、痛々しく化膿した傷痕が無数にあつた。手當てを加へて氣力が漸く恢復して來たところで、シヤロツテ夫人が申立てた一伍一什は、大體次の通りのものである。

『私は、マーセルさんとの間に、貞操を疑はれるやうなことは、何もしてごさいません。世間での噂は只もう出鱈目です。私とマーセルとは、實はダンカンについて、非常に恐ろしいことを知つてゐて、それを知つてゐたばかりに、ダンカンから、このやうなひどい目に遭はされたのでございませぬ。』

私達は、あの密へ押しこめられて以來、毎晩々々、ダンカンの手で、身體を鞭打たれたり、ナイフで肌へ傷をつけられました。それはダンカンが、たゞ面白がつて、私達の苦しむのを見てゐたのです。彼は、狂人です。はじめは私達が、彼の秘密を口外しやしないかといふ懼れで、私達をあんなところへ押し込めたものに違ひなく、しかしあとでは、一息に殺してしまふのが惜しくなつて、一寸だめし五分だめし、デリ／＼と楽しみながら、殺す氣になつたものかと思はれます。

いつたい、どういふ秘密があつたのかと申しますと、ダンカンは、ある時、どこからともなく、可愛らしい娘さんを一人、邸へ連れて來たのでした。

その娘さんは、どこかあまり遠くないところのお百姓さんの娘だと思ひますが、ダンカンは、どんなことをいつて騙したのか、その娘さんを、巴里へ連れて行つてやるといふやうなことをいひ、こつそりと邸へ連れて來たので、連れて來た晩のうちに、私も秘書のマーセルも、ダンカンの部屋で、それは／＼恐ろしい悲鳴を聞きつけました。行つて見ると、娘は、土氣色の顔になつて倒れてゐ、それつき息を吹き返しませんでしたが、申すまでもなくダンカンは、何か無理なことをして娘を苦しめ、娘は、抵抗して逃げ出さうとしたために、首を絞められて殺されたものです。

私達がその場へ駆けつけた時に、もうダンカンは、正當な常識をすつかりと紛くしてをりました。

娘を殺してしまつたことを、世間へ向つて口外したら、私達を生かしては置かぬといつて脅迫し、娘さんの死體を、マーセルさんにも手傳はせて、トランクの中へ詰めてしまひました。恰度それは、女中がゐない晩のことで、私は、恐怖のために氣を失なつてしまひましたし、その失神状態からやつと正氣に戻つた時には、秘書のマーセルさんまでが、ピストルで嚇かされたこのとですが、口にタオルの猿轡をはめられ、兩手をうしろで縛り上げられてゐた始末です。間もなく私も、同じやうにして猿轡をはめられ、ピストルの銃口で背中をグイ／＼と小突かれながら、

古代墓標のある塚のところまで、その晩の夜明け近くに、追ひ立てられて行きました。

私達は、いつか機会をつかまへて逃げ出してやらうといふつもりで、一時、何をされても黙つてゐるよりほか仕方ありませんでした。審へ幽閉されて、地獄の責苦に遭されて、ある時はもう、殺されてしまつた方が楽になるのだとも思ひ、でも、神様がいつかは私達を助けて下さることがあるかも知れぬと、かすかな望みを抱くことによつて、辛くも今日までを生き長らへて來ました。

まるで總ては、地獄の夢が覺めたやうな氣持です。あの可哀相な娘さんの死體は、その後どうなつたことをごさいますか。私達は、古塚の中へ幽閉されて以來、塚の外で起つたことは、何一つ存じてをりません。私達は、兎も角助けて戴いたからよいのです。殺された娘さんこそ、本當にお氣の毒だつたと思ひます。』

いふまでもなく、その同情すべき娘の死體は、湖の底のトランクから、眼鼻立るも判らなくなり、誰も顔を背向けなくなるほどの痛ましい姿となつて、ダンカン逮捕と同じ日のうちに發見されたものである。

その後の警察での調査によると、娘は、その土地を十哩ほど離れた田舎町の、多少不良性を帯びた少女だつたさうだが、少女は、花の都の巴里に憧れて家出をし、家出をしたあとで、ダンカ

ンの魔手にかゝつたものと見られるのである。

考古學者ダンカンは、即刻裁判に附されたが、精神鑑定の結果によると、意外にも真正正銘の狂人だつた。そして、監獄へぶち込まれる代り、瘋癲病院へ閉ぢ籠められてしまつた。シヤロツテ夫人の父親レイヌ氏は、ダンカンが狂人の血統を持つてゐたとは知らず、ダンカンを相當の財産家と見て、金をめめてに娘を結婚させたのが、この不運を招いたものだとの噂もある。

紙カミ

芝シバ

居イ

屋ヤ



## 犬と女給

『でも美代ちゃん、止めときなさいよ、今更ら文句を言つて見たつて、死んだものが生き返るわけぢやないんだしさ。』

親子が引止めたのだけれど、美代子はすつかりと腹を立てゝゐた。

『うゝん、そりやさうよ。死んだものが生き返らないぐらゐ知つてゐるわ。だけど、あたし、どうしたつて我慢出来ないんだもの。行つて紙芝居屋さんに會つて、言ふだけのことは言つて来てやらなくつちや——』

さういつてまたヒステリックに、

『可哀相だわ、可哀相だわ。マリ子ちゃん、あたし達んところゐたら、そんなむごい目に遭ふことなんかなかつたのに。』

まるで子供でも失なつた母親のやうに、オイ／＼聲を立てゝ泣き出す始末だつた。

はじめそれは、極く些細な事柄に見えたものである。美代子と親子とは、共に銀座のカフェ・マドンナの女給だつたが、市内巢鴨の大和莊といふアパートに住んでゐて、最近までマリ子といふ牝犬を一匹飼つてゐた。ところが、この犬のことがもとで、後に述べるやうな恐ろしい事

件が持上つてしまつたのである。

マリ子といふ犬は、素性も何も判らない、テリヤと狒との雑種みたいな犬だつた。

大していゝ犬ではなく、しかしこれを美代子は、随分と可愛がつてゐたものである。

寝る時は抱いて寝るし、食事は牛乳と玉子と肉とをやる。御飯も口移しで食べさせたりするほどにしてゐたのだが、もと／＼彼女等は女給商賣

二人がカフェーへ行つてしまつたあとは、誰も犬の面倒を見てくれる者が無い。犬だけを部屋へ閉ぢ籠めて置くと、物を喰ひ破り蹴散らかしひつくり返し、甚だ亂暴を働かし、鎖でつなぎつ放しにして置くのも可哀相——かといつて部屋の外へ出して置くと、アパートのバルコニーへ行つて糞をするといふ悪い癖があつたし、おまけにアパート管理人の子供に二度までも噛みついたことなんかあつた。結局、犬のことで絶えずアパートから苦情が持込まれたから、美代子も到頭犬を飼ひ切れなくなつて、これがある紙芝居屋さんにやつただけで、さてそれから二週間ほどすると、この紙芝居屋がマリ子をぶち殺してしまつたといふ……これを美代子は、ふつとよそから聞込んで來たのだつた。

『だつてネ、紙芝居屋の小父さん、マリ子を電信柱へ結へつけといつて、棒か何かで殴り殺しにしたつていふんだもの。通りがかりで偶然それを見て來た人も、可哀相で見えてゐられなかつたつて

うつてゐたわ。』

『紙芝居屋さん、思つたより亂暴な人なんだわね。美代ちゃん、そんな人のところへ文句なんかつけに行つても、却つて何か、腹の立つやうなこと言はれやしない。』

『うゝん、大丈夫よ。口先きでなら、あんな男になんか敗けないわ。あたし、謝まらせて來なくつちや氣が済まない。マリ子を、殺させるつもりでやつたんぢやないんだもの。』

『それで、向ふの家、判つてる?』

『判つてるわ。マリ子をやる時、あたしが自分でマリ子を連れて行つたんだもの。こゝから五町ばかり行くと長屋があつて、その貧乏長屋の一番端つこの家に住んでゐるのよ。あたしがマリ子で困つてゐるつてことを、どこから聞いて來たのか知れないけれど、なら、私が可愛がつて飼ひます、私も犬は好きですから……なアんでいつて連れてつた癖に、二週間も絶たないうちに殺すなんて、そんな法つてあるもんぢやないわ。——ぢや、あたし行つて來る。マドンナへ行くの遅れるけれど、糸子ちゃんからマダムにさういつて置いてネ。』

カフェーへ行く時刻が午後の四時ときまつてゐる。それ前にといふので、つひに美代子は我慢出來ず、腹立ち紛れにアパートを出掛けて行つたが、さてその結果は、どんなことになつたのであらうか。

今にも雪が降り出すかと思はれるやうな灰色の空。

美代子は、ハンドバッグを抱へ、オーバーの襟を掻き合して、靴をコト／＼と鳴らしながら、急ぎ足に紙芝居屋を訪ねて行つたが、すると恰度向ふの長屋の前で、バツタリ紙芝居屋に會ふことが出来た。

紙芝居屋は、リヤカーのついた自轉車に乗つて、そのリヤカーにはおきまり通り、紙芝居の道具と飴の箱とを載せてゐるが、顔にはサンタクロースに似せて作つた白い髯のお面を冠り、頭に房のついた三角帽を冠つてゐる。多分、一巡り商賣をして来たところだらう。これが向ふから自轉車で来て、ヒラリと長屋の前で降りたところへ、美代子が恰度に行き着いたのだつた。

こゝで一丈説明をするよ。

この紙芝居屋は、名前を倉橋鐵次といつて、脊中が駱駝の瘤みたいに曲つてゐるし、顔が、昔怪我でもしたことがあるのだらう、半面恐ろしい黒痣になつた、怖い顔の男だつた。

姿や形の怖い割には、性質の極く和温しい男だといふものもあつたが、兎も角その怖い顔をむき出したと、稼業の紙芝居屋をやつたところで、子供達が氣味悪がつてゐて寄りつかない。その結果考へたのだらうけれど、いつもサンタクロースのお面を冠つてゐて、これはどうやら成功した様子。紙芝居屋は、子供達の間で、なか／＼人氣があるやうになつた。自轉車で街々を廻つて

行くと、

『来たよ／＼、サンタクロースの紙芝居屋さんが来たよ。』

子供達が、大喜びで、ぐるりへ集まるやうになつたのであつた。

——美代子は、ツと歩み出て、紙芝居屋の前へ立つた。

『紙芝居屋さん！』

『へっ』

『あたし、あなたに言分があつて来たのよ。あなた、あたしんところから貰つて行つた犬をどうして？』

『へ、へい……』

『へいぢやないわよ。あなた、あの犬を殺してしまつたつていふわネ。あなた、あの犬を可愛がるといふ約束で、あたしの所から連れてつたんぢやなくて？』

### 恐ろしき凝視

綺麗な洋装の若い女が、僞僕でサンタクロースのお面をつけて、頭に赤い三角帽を冠つてゐるやうといふ、この風變りな紙芝居屋をつかまへて、いきなりと眞正面から掛合ひを始めてゐる。も

しかして通行人でもゐたとしたら、忽ちそこは、黒山の人だかりになつたことだつたらう。幸か不幸か長屋の前は、黒い長い扉の續いた工場の裏手で、その時誰も人通りはない。

紙芝居屋は、はじめ、驚いた風だつた。

お面があるから、顔色の變化までは判らない。が、彼は、明らかに何か狼狽してゐた。美代子の言葉にヘドモドして、すぐには返事も出来なかつたし、そのうちにキヨロ／＼とあたりを見廻したかと思ふと、ゴクンと唾を呑み下ろして、漸く譯が呑み込めたといふ様子。半ば獨言のやうに、

『あ、さうか。あの犬のことか。』といつた。

美代子の方は、腹の底まで煮えくり返るほどの口惜しさだから、猶も頭からガン／＼やる。

『何さ、紙芝居屋さん！ あの犬のことかも知れないんだわよ。あんた、マリ子を、なぜ殺したの？』

『へ、へエ、それは……』

『マリ子はネ、あたしの大事な大事な犬だつたのよ。それをあんた、可愛がるといつたればこそ上げたんぢやないの！』

『さや、まア、お嬢さん……』

『お嬢さんだなんて、お世辭なんか止しといてよ。あたし、腹が立つて……』

『ごもつとも……ごもつともです……ですが、ね、お嬢さん……私は、その、これにや譯があるんですよ。あの犬を殺したといふことについては……へ、へイ、譯がちやんとあるのでして、話せば、解つて下さると思ふんですが……』

『譯なら、言つて見てよ。聞くわよ。』

『へ、へイ……では、申します……申しますが、どうもこゝで立話では……』

『困るつていふのネ。こゝで話せないのなら、どうすればいいの。』

『家へ入つて下さい。人だかりでもすると面倒ですし、汚い所ですが家人中なら、ゆつくりお話しも出来ますよ。さア、まア、入つて下さい、エツヘツヘツへ。』

實際人だかりを恐れたのだらう、またキヨロ／＼とそこらを見廻しながら、笑つた聲の厭らしさ。

そこは、相變らず、まだ誰も人通りがない。紙芝居屋は、美代子の返事も待たないで、自転車を自分の家の前へ立てかけて置き、さて腰から、鍵の束を取出した。さうして、

『いやどうも、一人きりの歸暮らしますよ。貧乏でも、留守中の用心だけはして置きますとネ。エツヘツヘツへ。』

辯解のやうに言ひながら、また薄つ氣味の悪い笑ひ聲を立て、戸口の南京錠を外してしまつた。

躊躇しながらも、美代子がそこへ入つて見ると、中はいかにも貧乏暮らしと見える狭つ苦しい家。

サンタクロースのお面もそのままで紙芝居屋は、自転車を土間へ入れてから、後手に表の戸を閉めたが、

『さア、どうです、上つて下さる。』

『ええ、さうよ。上らなうわ。』

『さうですか。ちや、座蒲團でも出させう。實は、あの犬を殺したのは……』

言ひかけて、何か一寸ウロ／＼してゐる。

やがて、ほこり塗れのドク靴を、スボリスボリと脱ぎ捨て、とつときの三疊へ上つた紙芝居屋は、そこでも變てこに思案したが、まだ矢張りお面は冠つてゐる。見たところ、三疊の向ふが、六疊ぐらゐの部屋らしい。その奥の部屋から、片手にぶら下げて持つて來た座蒲團は、垢でペト／＼光つてゐて、腰かける氣にもなれないものである。

『ねえ、紙芝居屋さん。』

『ハイ。』

『何も構つてくれなくつても結構よ。それよりかあたしマリ子のことを。』

『マリ子……マリ子と言ひますと。』

『あら、いやだ。犬の名ぢやないの。さつきも言つたばかりだわ。名前まで忘れてゐるなんて、矢つ張りあんた、ちつともあの犬を可愛がらなかつたのだわね。』

『へエ、へへへ……なアに、一寸、度忘れをしたとげなんですネ、えと、さうでした、あの犬を私が殺したつてもものほ、つまり……結局あの犬が、狂犬病らしかつたものですから。』

『狂犬病つて、そんなこと絶対に無い筈だわ。マリ子は、一月ほど前に、ちやんと注射をして貰つたばかりですもの。』

『え、さうですか……ちや、注射したつてなら、狂犬病ぢやないかも知れんが、でもあいつ、とても様子が變でしてね。』

『變て、どんな工合……』

『矢鱈に、誰にでも吠えるんですよ。それから……さうでした、飯をやつても飯を食はず、人に噛みついて暴れ廻つて、よだれをダラ／＼流しましてね、眼付がまたすつかりともう氣違ひ染みて……』

一通り、狂犬病らしい徴候を述べたには述べたが、あとで思ふと紙芝居屋は、さういふ狂犬病の徴候を、どこかよそで聞いたことがあつて、それをそのまま美代子の前で、ただもつともらしく述べ立てたよけのものではなかつたらうか。

辯解を聞きながら美代子の方では、その時ふつと氣のついたのが、土間の隅にコロリと轉がしてあつた小井と、その井のうしろに、チラリと見えてゐた犬鎖とである。

「あゝ、あの井も鎖も、あたしがマリ子ちゃんのため、一緒に持つて来てやつたんだわ。マリ子ちゃん、いつもあの井で御飯を食べたのに。」

哀れなマリ子の形見だから、思はず立つてそこへ近づき、井と鎖とを手にとると、ズル／＼鎖が引きずられた途端に、ポトリと何か落ちたものがある――。

「あらッ！」

美代子は、すぐ下を見て叫んでゐた。

さうしてまた、一瞬の間を隔いて、

「あゝッ！」

激しく息を内へ引き、すつかりと顔色を青くした。

落ちたものは、生憎と美代子の靴の甲へ、恰度につかつてしまつてゐた。

見まいとしても、自然、見ずにはゐられなかつたものである。

それは一本の指――人間の指が一本、何か生きてゐる虫のやうな恰好をして、ポトリ、靴の甲の上へ落ちたのだつた。

指は、右手か左手か、また人差指か中指か、そこまではとても判らない。が、兎も角、爪のついたまゝ根元から断ち斬られてゐて、その斬口には黒々と血の痕がこびりついてゐる。多分それまでは、犬の鎖にでもからまつてゐて、土間の隅ではあることだし、一寸、見えないやうにはなつてゐたのだらう。鎖をズルリと持ち上げられると、その拍子に鎖を離れて、偶然そこへ轉げ落ちたものに違ひない。

美代子は、ハツとばかり怯えてゐたので、手にしてゐた井を取落し、その井はガシリと音を立て、ひびが入つた。さうして、

「あゝ、厭だわ。こんなもの……」

言ひながら足をブルンと振ると、今度は指が横へ飛んで、土間の真ん中へチヨコンと立つた。まるで指が、土間の下から生えて来たといふ恰好である。

「……………」

何も言葉には出さず紙芝居屋は、ぬつと首を突き出して、土間へ生えた指を眺めた。

それから、非常にのろ／＼した態度で、ゆつくり顔を上へあげると、こゝで美代子と紙芝居屋との視線が、バツタリ合った。

どちらも暫らくのうち無言、たゞ、紙芝居屋の、お面の下から覗いてゐる視線は、水のやうに冷たくて残忍で、ちつと美代子の顔を見たまゝ動かなかつた。

もう、マリ子のこと、狂犬病のことも、二人共に口へ出さない。薄つ氣味の悪い人間の指が、しかも、根元から断ち斬られた血染めの指が、思ひがけず眼の前へ飛び出したといふのは、この紙芝居屋が住んでゐる長屋のうちで、何か、途方もなく、恐ろしいことが行なはれたといふ證據である。

美代子は、お面の下の恐ろしい視線に射すくめられて、何か言はうとしても唇が動かさず、ただガクガクと膝がふるへた。さうして、僅かにチリ／＼とあと退りして、うしろ手をそつと伸ばしながら、入口の戸を探らうとすると、その時紙芝居屋が低い聲でいつた。

「ねえ、お嬢さん。どうも、厭なものをお目にかけてしまひましたねえ。」

「あゝ、あたしは、もうあの……」

「氣味が悪いから、歸らしてくれといふんでせうねえ。なるほどなるほど。」と紙芝居屋は、さも察しが良ささうに頷いて見せて「ええ、だが、生憎と私の方ちや、かうなつてしまつたからに、

は、歸つて貰つちや困るんでしてね。」

「えッ！」

「指が出て来て、そいつをあんたが見てしまつたといふことは、私にとつても運が悪いし、イヤどうもあんたにだつて、ひどく運が悪かつたんですよ。ねえお嬢さん！」

既にその言葉には、明らかに恐ろしい威嚇の意味が、露骨な口調で現れて來てゐる。

「歸つちやいけないつたつて紙芝居屋さん、そりやあたし困るわよ。あたし、何も、こんな指のことなんか……」

美代子は、懸命な努力で氣を張つて、やつとさう言ひかけたが、その時にまた紙芝居屋は、ソツとするほど厭らしい身ぶり、ユラリとそこへ身を起してゐる。

危険が、今やハツキリと感じられる。

「あゝ。」

と叫んで美代子は、サツと横さまに身を引きかけたが、

「エへへへ、指のこと、誰にも喋らないつていふんですか。本當に喋らずにゐてくれりや結構なんだが……」

紙芝居屋は、油断させるつもりだつたらう、わざとゆつくりかういつて、次の瞬間、素早く土

間へ飛び降りると、ぐいと美代子の手首をつかまへて、それを驅ごと、上櫃の方へ引き寄せてしまった。

「呀ッ、何をやるのさ、紙芝居屋さん！」

美代子は、聲を限りに叫んだつもりで、しかしその聲は、恐怖に壓倒されたせゐだらう、泣くやうな呻くやうな、低い小さな聲にしかならない。

「厭よ〜、手を放してよ。」

「放しません。放したら、あんた逃げ出すからね。」

「あゝ、あたし……逃げていけないのなら逃げないわ。お願ひよ。後生だわ。」

「後生でも何でも、放すことア出来ないね。オツトツト、大きな聲を出しちやいけねえ。こゝは野中の一軒家ぢやない！」

油断を見て、美代子が腕をふり放し、大聲に人の助けを呼ぼうとすると、咄嗟にまた紙芝居屋は、ぐいと左手で美代子を掴み寄せて、右腕を、ぐるりと首の方へ廻したやうである。

「あれえッ、誰か来てえッ！」

美代子は、最後に一度だけ、鋭い悲鳴をあげることが出来た。

さうしてしかしその時には、頸の下の咽喉首を、ぐつと力一杯絞めつけられてゐたので、も

うあと、何をいふことも出来なかつた。

長屋は、紙芝居屋の住んでゐる隣りの家が、二軒も續いて空家だつたし、場所は淋しい工場の裏手で、時刻はまだ日暮れ時。晝のうちの出来事だつたとは言ひながら、この時紙芝居屋の家で起つた騒ぎについては、恐らく、滅多に氣付いたものはなかつたらう。

美代子は、バタ〜足を動かした。

手で、紙芝居屋のお面や胸の邊を引つ騒かうとして、激しく荒く身悶えした。

ところが、恰度その最中に、紙芝居屋の家の前を、近所の悪たれらしい子供が二人、お煎餅をポリ〜食べながら通りかゝつて、

「オヤ、何だい紙芝居屋さんの家、戸がガタ〜鳴つてるよ。」

「紙芝居屋さん、歸つて来てゐるんだね。オヤ〜、何か人の唸るやうな聲もするよ。」

「病氣だね、きつと、腹が痛いんだよ。あの小父さん、時々お酒を飲むからね。」

言ふには言つたがそれつきりである。

「さア、日が暮れたから歸らうツと。」

「歸る歸る歸る、蛙が鳴いたから歸る。」

子供達は、そのまま、紙芝居屋の前を歩き過ぎてしまつた。



## 不思議な客

糸子は、その夜カフェ・マドンナで、何事も知らず立働いてゐた。

クリスマスに間近い季節のことで、客は相當に立て混んでゐる。遅れて来るといつた美代子の方は、夜になつても姿を見せず、でも糸子は、

『美代ちゃん、紙芝居屋さんの所へ行つたあとで、また何か、用が出来たのかも知れないわ。』  
呑気にそんなことを考へたばかり、大して美代子とは氣にせず、あちらこちらとぐるを巻いて、勝手な熱を吹いてゐる客の間を、目眩しくサーブスしてゐたのだつた。

美代子のが、はじめて一寸氣になり出したのは、夜の九時か十時だつたらう。その時マドンナへは、一人見知らない顔の客が入つて来たが、その客は、帽子を目深に冠り外套の襟を立てたまゝ、なるべく人眼につかぬやうな片隅のボックスに腰を下ろすと、二杯か三杯、ウイスキーをとつて飲んだやうである。やがてその客は、番に當つてゐた女給の一人と何かボソ／＼話し始めて、どうやらあまり長居はしない、三十分ほどでカフェーを立去つたが、するとそのあとで糸子のところへ、今まで客の相手をしてゐた女給が、ヒラ／＼客席を縫ふやうにしてやつて来たのだつた。

『ねえ、糸子さん——』

『なアに。』

『今ね、あたしの番だつたお客さん、實は美代ちゃんのことについて来たんだつていつてゐたわよ。あたし、美代ちゃんのことだといふのなら、あなたが一番に美代ちゃんとは仲好しだし、そのことをお客さんに話してあげて、あなたに来て貰はうと思つただけど、お客さん、それほどにしないでもいゝつていふし、言傳てだけあたしに頼んで行つたわ。』

『まア、さう、どんな言傳て？』

『美代ちゃんね、今夜急に用が出来て、その用のために當分は、マドンナへ出て来るわけに行かないんですつて。あなた、アパートへ一緒に住んでゐるでせう。そのアパートへも、暫らく歸らないからつていふ話だつたわ。今のお客さん、美代子さんと知合の人らしいのよ。美代子さんに、その言傳てを頼まれて来て、またそれをお客さんが、あたしに言傳てして行つたといふ譯なのよ。』

糸子は、ふつと妙な氣がしたが、直接にその客と會はなかつたので、何だかどうもハツキリしない。

『だつて、變ねえ。美代ちゃん、どんな用事が出来たんでせうか。マドンナへも来ないし、アバ

トへも當分歸らないなんて……」

考へながら訊き返すと、相手の女給は、至つて呑氣な顔附である。

「ええ、それね、あたしも一寸妙だと思つたの。お客さんに、何故だかつて訊いたらば、お客さん、なアに心配なことではない。あとで譯は解ることだし、どうせ長いうちのことではないから、美代子さんがカフェーへ來なくつても、またアパートへ戻らなくつても、心配せずにおて貰ひたいなんて言つてゐたわ。口吻では美代ちゃんに、何かとてもうまい話があるやうなの。」

「うまい話ならいゝけれど、譬へどんな急用があつたにしても、あたしにもそのことを話さないで、たゞ言傳てだけで美代ちゃんが、急にどつかへ行くなんて、一寸どうかと思ふわね。そのお客さん、どんな人だつた？」

「さア、どんな人つて、あまり立派な人でもないし、かといつて貧乏人でもないやうだわ。さうさう、さういへば、お酒を飲む時に見ただけけれど、額の一吋下のところに、何か傷をしたことがあるんだわネ、ベン先き型の傷痕があつたやうだわ。糸子さん、さういふ傷痕のある人知つてゐる？」

「さア、知らないわ。美代ちゃんの古いお馴染みか、でなきや、親戚とか田舎の人とか、そんなやうな人に逢ひないわネ。——まアいゝわ。心配することでもないつてのなら、そのうちには美

代ちゃんも歸るだらうし。」

話は結局それだけだつた。

要するところ、美代子がどこかへ行つてしまつて、しかしそれは、心配なことではないのだから、當分のうち騒ぎ立てずに、美代子の歸りを待つてゐてくれればよいのだと、さういふ傳言をするために、客は、わざ／＼マドンナまで來たものらしいのである。

その夜マドンナは、看板間近になつてから、一時ドヤ／＼と客が入つて來た。

さうして糸子は美代子のことを、多少氣にはしながらも忘れてしまつた。

看板になると、糸子は、少し身體が弱い。ぐつたり疲れ切つてアパートへ戻つたが、そこは晝のうち自分が出て行つた時のまゝで、美代子はゐないのだしひどく淋しい。

「でも美代ちゃん、どこへ行つてしまつたのか知ら。今まで、さういふことについて、美代ちゃんが何も話したことはないのだし、考へると變な氣がするけれど、まア／＼、長いことではないといふから、いづれ歸つて來るには違ひない。歸つて來たら、譯を聽いて見ることにして、その間あたしは、せい／＼のんびりと大威張りで、この部屋の中で寝てやらうツと。」

割りに呑氣に考へながら、やがてぐつすと眠り込んでしまつたが、さてその翌日になつて見ると、偶然にといふか恰度にといふか、糸子が、たゞ黙つて美代子の歸りを、待つてばかりゐら

れないことになつたといふのが、實はその日が糸子にとつては、カフェー・マドンナへ早出の番で、午後の二時までに行かねばならない。平日よりは半分早めに、晝少し過ぎにアパートを出て、いつものバスの停留所まで歩いて行くと、途中に一軒の洋館があつて、その前に一寸した廣つばがある。この廣つばで、例のサンタクロースのお面に三角帽、背中が駱駝の瘤みたいに曲つてゐる、紙芝居屋の姿を見かけたのだつた。

「折しも現れた怪漢は、黒覆面に無反の大刀、横から坊主をつかまへて、あゝコラ／＼、お前はその娘をつかまへて何をしてゐる。怪しからん坊主だ成敗してくれる……ヤア、何だこの黒頭巾め。ウーム、察するところ貴様こそは、近頃評判の辻斬りだナ……ウーム、何を小癩な生臭坊主、エイ、ヤア、エイ、エイ／＼／＼。」

紙芝居屋は、片手で拍子木を叩きながら、何か剣劇物の一場面を、思つたより下手な口調で、集まつた子供達に説明してゐるところだつたが、糸子は、あゝさうだわ、あの紙芝居屋さんだわと思つた途端、一寸そこへ立停つて、子供と同じやうに紙芝居を覗き始めてしまつた。

紙芝居屋は、糸子のゐるのに気がついてゐたかどうか。

彼は、間もなく説明を終つた。

さうして、説明が終ると子供達が、

『小父さん、頂戴、頂戴——』

といひながら、一銭か二銭づつ銅貨を出して、箱の中の飴を買ひ始めた。

糸子は、昨日のことを思ひ出して、美代子がこの紙芝居屋さんのところへ行つて、どんな風に文句を言つたのか、それを一寸訊ねて見たいやうに思つてゐたが、その時子供達のうしろからは、向ふの洋館に住んでゐる主人だらう、體格の立派な、色眼鏡をかけた外國人が近づいて來て、

『オヤ紙芝居屋さん。あなたの飴、いつもオイしいですよ。私にも、また賣つて貰ひませう。』

言ひながら、五つ六つの一銭銅貨を、掌にのせて差出してゐる。

『まア、珍らしい。外國人なんか、こんな紙芝居屋さんの飴を買ふんだわ。』

糸子は、眼を圓くしてその光景を眺めてゐたが、するとまた紙芝居屋は、

『ハイ／＼、これはどうも、毎度有難う。』

手を伸ばして銅貨を受取り、さて、飴の包みを、箱の底から掘み出して、押しつけるやうに外人の手へ渡さうとする。

その拍子に、お面を冠つた紙芝居屋の顔が背の高い外人の顔を覗くためだつたらう、ひよいと上へ持ちあげられたので、糸子は、思はず、

「呀ッ！」

と叫ぶところだった。

サンタクロースのお面は、さう大きくはない。それにまた、植ゑつけてある白い髯も、大分摩り切れてゐてまばらである。お面の下に紙芝居屋の顎が喰み出してゐて、しかもその顎の、やゝ右寄りになつた咽喉首には、チラリと赤くひつつりになつて、ペン先型の傷痕が、明らかに見えてゐるのだつた。

彼女は、ドキンと胸が躍つた。

そして、すぐと、昨夜マドンナの朋輩が、自分に話してくれた不思議な客のことを思ひ出してゐた。

『……さう／＼、さういへばそのお客さんは、顎の一寸下のところに、ペン先型の傷痕があつたやうだわ……と、さうだ、確かに、その時に聞いた筈だ。昨夜マドンナへ、美代子さんからの言傳てを持つて来た客が、その傷痕のある男で、あゝ、今こゝに、同じ傷痕が、ちやんと紙芝居屋さんの顎にもある！』

考へると、なぜかゾツと身ぶるひのするやうな氣持でもある。

彼女は、自分でもそれが判るほど、ドキドキ心臓が鳴り出した。

紙芝居屋に、自分のこゝにゐることを、氣付かれては工合が悪いと思ひ出し、そつとうしろへ身を引いて、子供達の蔭へ隠れるやうにしながら、しかし、猶もちつと紙芝居屋の舉動を見守つてゐた。

ほどなく紙芝居屋は、飴も一巡賣り終つたし、ヒラリと自轉車に跨がつて、廣つばを向ふへ横切つて行く。

親子は、狼狽してそこらを見廻し、すぐと紙芝居屋のあとを追ふと、運よく交番があつたので、息を切らし／＼その交番へ駆け込んだ。

『あの、お願いです。』

『え？』

『紙芝居屋さんが怪しんです。紙芝居屋さんを調べて下さる。』

『紙芝居屋つて、どこのだういふ紙芝居屋？』

『あの、サンタクロースのお面を冠つた、僞僕のやうな紙芝居屋さんです。』

『ふーん、あのサンタクロースの親父さんかね。ありや何も怪しい人間ぢやない。いつも、この近所を廻つて歩いてゐる。あの男が、何をしたといふんかね。』

捜査も、サンタクロースのお面には見慣れてゐると見えて、格別驚いた風もなく、キョトンと

して親子を眺めてゐる。

親子は、何もかも話し出した。

犬のこと、美代子のこと。さうして美代子が、昨夜アパートへ歸らずに、しかしそれについては、ちゃんとマドンナへ客が来て、美代子の歸らないわけを言傳てして行つた事實があるが、さしてしかし、その言傳てをして行つた客といふのが、どうやら今の紙芝居屋と、同一人物であるらしいこと——。

「フン、なるほど。」

と巡査は考へこんだ。

さうして、

「なるほど、顎の下に、同じ形の傷痕があるといふのは變てこだね。」

と、ゆつくり／＼言ひ直した。

ほど経た時に、この巡査の報告で、所轄巢鴨署からは三名ほどの刑事が、ともかく紙芝居屋の家を調べようといふので、ドカ／＼出張して來たのである。

### 意外な發見

刑事達が、例の長屋へ着いた時、紙芝居屋はまだ歸つてゐなかつた。

時刻が早いから、留守中のことは知らないで、街々を廻つてゐたことであらう。

見ると、その家の表には、南京錠がかけてあつたが、この南京錠は、こんな貧乏長屋には不似合なくらゐ、大きくて頑丈で念の入つたものである。

「おゝ、こりやどうして、嚴重極まる戸締りだぞ。空巢狙ひが入つたつて、どうせ大したものはない筈だが、これだけに嚴重な戸締りは、どうやら曰くがあるらしいね。」

刑事達は、錠を眺めたゞけで、すぐと互ひに頷ぎ合つた。

それから、構はずにこの錠前を外してしまつた。

中へ入ると、土間とつゞきの三疊と奥の間と、これは前の日に美代子が見た通りのもので、大して變つたところはない。

破れた唐紙、芯の出た畳、さうして剝げちよろけになつたちやぶ臺と垢だらけの座蒲團。

だが刑事は、すぐと異状を一つ見つけた。

「オイ、こりや變だね。紙芝居屋の奴、近頃自分の家で、飯を食つたことがないと見えるよ。」

「へえ、どうして？」

「鏝暮らしだから、前には自炊をしてゐたに違ひない。臺所に、自炊道具がどうやら一通り揃つ

てゐるが、鍋も釜もほこりだらけだ。つまり、最近、自炊をした形跡がないんだよ。オヤ、棚に、ウキスキーが二本、並んでゐるぞ。』

手にとつて見るとウキスキーが、赤レベルだがジョニオカで、一本十四圓はする大した代物。『オットこいつ、贅澤な奴だぞ。こんな酒を飲んでゐやがる。』

驚いて刑事は言つてゐたが、贅澤はたゞにそのみでなく、ちやぶ臺に置いてあつた吸殻落しを見ると、これには外國煙草の金口が、幾本も差しこんである始末だつた。

『ウム、なるほどこりや、十分怪しいところがあるね。紙芝居屋が、ジョニオカのウキスキーを飲んで、ゲルベゾルテを喫かすなんて、こんなべらぼうな話は聞いたことがない。』

さうして彼等は、次に押入れを開けて見て、思はずチタチとあとへ下つた。押入れには、垢のついてゐない蒲團があり毛布がある。

が、それはまだいゝとして置き、その毛布が、變に不自然な恰好をしてゐたから、一人手を出してひつべがすと、もうすぐにその下から、哀れな女の死體が出て來たのだつた。

無論、あとですぐに判つたが、それこそ美代子の變り果てた様である。美代子は、殺されてこの押入れに、冷たく横たはつてゐたのだつた。

『こりやいかん。思つたよりの大事件だ。奴を逃がしちやならないが、ズキの廻つてること知つ

てやしまいな。』

『大丈夫だらう。兎も角、死體の始末をせにやらんし、きつと歸つて來る筈だ。——が、これで見ると紙芝居屋め、女を殺してしまつて置いて、その女の行方を探されちや敵はんといふので、昨夜一芝居うつたんだね。カフェーへも出ない、アパートへも歸らないが、心配をするなどいふ言傳てをしたといふのが、つまり女の歸らないのを、人に怪しませまいための魂膽だつたのだぜ。』

『違ひない。商賣柄、お芝居は相當考へてゐやがる。ところで、この女を殺した理由はどういふのかな。』

『つかまへて、泥を吐かせりや判つて來るさ。前科者でもないやうだが、なか／＼こいつ一筋縄の奴ぢやないらしい。ええと、さア、外へ出よう。隠れてゐて、奴の歸つたところを引つくゝるんだ。』

刑事達は、小聲に囁き合つてから外へ出て、表の鏡前も元の通りにし、手筈をきめて紙芝居屋を待つた。

リリリリリ……自轉車のベルが鳴る。

そして、サンタクロースの紙芝居屋は、間もなく長屋の前へ戻つて來た。

途端に、

「オイ、紙芝居屋のオツさん！  
聲をかけて刑事の一人が、前へいきなり立ち塞がると、

「えッ！」

答へて自轉車につかまつたまま、ギョツとそこらを見廻してゐる紙芝居屋。

うしろから、殆んど同時に二人の刑事が、

「オイ、よく戻つて来たな。」

と言ひながら、すいと姿を現はしたから、もう無論、しまつた！……とは思つたのだらう。次の瞬間紙芝居屋は、

「……………」

何か、意味のとれぬ言葉で大聲に叫んだ。

さうして、バツと足をあげて前にゐた刑事の胸を蹴ると、ふりむきさまうしろの刑事に、素早くドンと體當りをくれて、タタタツとそこを逃げようとする。

「阿呆！ 逃げられるなら逃げて見ろ！」

約束したやうに三人の刑事が、同じ言葉で罵つた時、既に紙芝居屋の兩の腕には、ぐいと捲き

ついた三本の捕縄が、ズズズツ！ 白い蛇のやうになつて伸びてゐる。

紙芝居屋は、また、變てこに意味の判らない言葉で叫び立てた。

さうしてそれから、野獸のやうに暴れ廻つて、手首にかかつた繩を外さうとし、しかし、つひにそれも叶はずに、ずでんどうと地べたへ投げ倒され、そのまゝ下へ組み敷かれてしまつた。

「往生際は、もつと綺麗にするものだぞ。オイ、紙芝居屋、顔を上げる。」

刑事が、さすがに息を弾ませながら、上から襟首をぐつと掴んで、無理矢理に紙芝居屋を引き起すと、この時既に長屋の前へは、今の騒ぎに気がついて、バラ／＼人が走つて來たし、同じ長屋の棟續きに住んでゐるのだらう、子供や女もそこへ駆け出して來てゐて、そのうちの十二三になる男の子が、ハツと驚いたやうな聲で叫んだ。

「あれッ！ 違はいい！ 紙芝居屋さん、いつもの小父さんと違つてらい！」

子供が叫ぶのも道理紙芝居屋は、今の格闘をしたゝめに、顔からサンタクロースのお面がすり落ちてゐる。

その面の下は、年頃三十二三歳、苦味走つた顔付の、眼玉のギロリと光つた顔だつた。子供のいふ、いつもの小父さんだつたらば、顔に恐ろしい黒痣があつて、その黒痣を隠すため、お面を冠つてゐた筈である。あゝ、だが、その黒痣はどこにも見えない。あるのは、たゞ顎の下のペン

先型をした傷だけである。それは、前に名前を述べて置いたが、倉橋鐵次といふ紙芝居屋ではない。全く、別の男になつてゐるのだつた。

『ウーム。』

刑事は、唸つてゐた。

三人共、こゝへやつて来る前に、無論紙芝居屋が、本來どんな男だつたかといふことは、豫備知識として聽いて來てゐたわけ、捕へて見たこの紙芝居屋が、表面だけお面と三角帽とで胡魔化してゐながら、實はまるつきり別人となつてゐたのを發見して、殆んど開いた口がふさがらなかつた。

『オイ、待て、この男の脊中は、一體どういふ脊中だ？』

一人の刑事が氣がついて、脊中をドシンと叩いて見ると、何かフンハリと柔かい氣がする。着てゐたボロ／＼の服をその場で脱がせて、チヨツキも無理に剥ぎ取ると、下から落ちたのはメリヤスの股引。股引を、紐でくゞつて丸めたのを、男は、僞僕と見せて脊負つてゐたのだつた。

## 眞相

紙芝居屋の倉橋鐵次に化けてゐた男を、刑事達が所轄署へ連れて行つてから、いかにして取調べが行なはれたか、そのことはも早、詳細を説明するにも當らないだらう。

男は、型の如くはじめのうち、頑強に口を結んでゐて、容易に泥を吐かなかつたが、結局總てを喋らせられる時が來た。第一、倉橋鐵次に變装してゐた事實がある。それから、美代子の死體が發見されてゐる。これで、どうせ逃れられぬことが判つてゐるから、今更ら何を隠してゐても仕方がない。男の自白したことを、便宜上こゝで、順序正しく書き並べると、その内容については、まだ／＼吃驚するやうなことが澤山にあつた。

以下、その要點だけである。

(イ) はい。美代子といふ女は、確かに私が殺しました。實は、あの女が、犬のことで私の所へ文句を言つて來た時に私はひどく狼狽したのです。あの女が、犬のものと飼主だつたといふことを、私は、あとで申すやうな譯合で、少しも知つてはをりませんでした。いきなり、犬のことを言はれたから、犬を殺した覺えはありますが、どうも大層困つてしまつて、兎も角何とか言譯をして置かうと思ひ、でも、人だかりがあると、私に後暗いところがあつて困るものですから、萬一の場合を心配して、家の中で言譯をしようと考え、それで女を家の中へ入れたのです。勿論



その時は、殺す氣持はありませんでした。

(ロ) で、家の中へ入つてから、何しろ一番悪かつたのは、女が、犬の鎖をいぢつた時、人の指が出て来たことで、それさへなかつたら、まさか私も、あの女まで殺しはしなかつたでせう。指を見られては、萬事が露見するもと思ひ、つひに殺してしまつたのです。

(ハ) 殺したあと、どうしたらよいかと考へましたが、兎も角死體は、あとで處分をすることにして、その時女の持つてゐたハンドバッグを見ると、名刺が入つてをりまして、女が銀座のカフェーの女だと判つたので、とりあへずカフェーへ出かけて行き、女が急にゐなくなつてしまつたことを、誰にも氣にして貰はないやう、一つ細工をして來ましたが、その詳しいことについては、總てお察しの通りです。たゞこの時に、顎の下の傷痕を見られてゐて、これがもとで私の悪事が露見しようとは、夢にも思つてゐませんでした。小細工をするためにカフェーへ行つたといふ、このことが却つて失敗のもとだつたのです。

(ニ) さて、私の家で、女が見つけ出した指のことですが、あの指は、實はほかでもありません。あれこそ本當の紙芝居屋、倉橋鐵次といふ男の手から斬り落した指だつたのです。毒食はゞ血まで、何もかも申します。倉橋鐵次も生きてはゐません。これは私一人でなく、ほかにも仲間があつてやつたのですが、倉橋は一週間ほど前に殺しました。殺して死體を、あの長屋の床下へ

埋めました。殺した時、やり方がうまくなくて、倉橋も抵抗しましたし、こつちの匕首を、素手で搦んだりなどしましたから、その時に指が斬れたのです。たゞ、私は、その指が、土間の隅へ、落ちてゐるとは知りませんでした。家の中を掃除なんかしたことがないし、それで全然氣がつかなくなつたのです。犬の井と鎖とは、前からあそこにありまして、それをそのまゝで放つたらかして置いたんです。いえ、犬は、倉橋をやつたあとで殺しました。私は犬が大嫌ひな性分です。犬もそれを知つてゐて懐きませんし、面倒臭くて殺したのです。

(ホ) 倉橋が、あの犬をどこから貰つて飼つてゐたのか、それは私は調べませんでした。今思ふと、調べずにはゐたから、美代子といふ女が來た時に狼狽もしたし、結局、この土壇場へ追ひ詰められるもとなつたのだと思ひます。

(ヘ) 次に倉橋をなぜ殺したか、それを申すには、正直のところ私は、かうやつて私を調べておいでに係官達に、一つ忠告を申さねばなりません。何かといふと、スパイのことです。スパイは日本にうんとをります。實に驚くほど澤山にゐて、しかもこのスパイ達は、實に巧妙に連絡をとつて、何やかや、日本の秘密を盗んでゐます。私は、實は、そのスパイ團に雇はれて、連絡係りをやつてゐまして、その連絡の方法として、紙芝居屋をやらうといふことを思ひつきました。倉橋がサンタクロースのお面を冠つて紙芝居屋をやつてゐる。あれに化けると都合がいゝと

気がついたのです。私は、前に一度、スパイの嫌疑をうけたことがあつて、素顔で外人と往來すると、すぐまた怪しまれると思ひましたし、それには、倉橋がサンタクロースで賣り込んでゐるから、それに化けるのが何よりの策だと考へました。結果として、倉橋を、先づ片附けることになつたわけです。

(ト) 私は倉橋になり切ると、早速、スパイ團の連絡を始めましたが、その方法は、スパイのゐる家の前へ行つて紙芝居をやり、スパイに飴を買はせるといふやり方でした。子供に賣る飴とスパイに賣る飴とは別物です。スパイに賣る飴の中には、ちゃんと秘密通信の紙が入つてゐますし、一方またスパイの方でも、私に金を渡す時、通信文を寄來したり、また時には、渡した銅貨に仕掛けがあつて、その中に通信文が入つてゐることもありました。この方法で、私は自轉車に乗つてあちらこちら廻り歩き、甲から乙へ、乙から丙へと、順繰りに連絡をとつてゐたのです。(チ) スパイは、私の知つてゐるだけは申しします。私も、一人きりで罪を背負ふのは損ですから、皆んな、同じやうに引つくとつて下さい。

(リ) 私は、本當は、日本人ではありません。國籍も、どこにあるのか判りませず、日本には一番長く居ましたから、日本語は達者に喋りますが、生れた時からの親知らず、支那人に拾つて育てられて、それから英國人のボーイをやつたこともあるし、サーカスなんかにもゐたこともあり

ます。よく見ればお判りでせう、私の眼の色は、日本人と違ひます。多分いろ／＼の血が混じつた、あひの子だらうと思ひますが。

言語道斷、憎むべきスパイ團の活躍が、圖らずも明るみに出て來たのだつた。

嚴重な取調べを受けながら、係官に向つて忠告をするなどといつてゐるのは、却つていかにも太々しく、兇惡そのものゝやうな惡黨ぶりではあつたけれど、その忠告も強ち役に立たないとはいへないだらう。スパイといふものは、目的のため、手段を選ばないといふ風がある。徳義も人情も捨てゝかゝる。こゝに恐るべき國際間の秘密が、いつも悠々と盗まれて行く。この紙芝居屋事件は、その一つの現れと見ていゝのだつた。

自白中の(ト)の項からして、あの時糸子が目撃した色眼鏡の外人も、矢張りスパイの一人であつたことが、當然、誰にでも領かれるだらう。事件中で、不幸にも生命を失なつたのは、紙芝居屋の倉橋と女給の美代子と、さうして雑種のチビ犬マリ子とである。事件發覺の端緒を掴まへた糸子は、無論のこと殊勳者であるが、その糸子は、あとで、美代子の靈に告げた。

『でもね、美代ちゃん。あなた決して無駄死にはなかつたのよ。紙芝居屋さんが死に、あなたが死に、さうしてマリ子まで死んだお蔭で、スパイが澤山つかまつたんですもの。皆んな、立派

に死んだんだわ。』  
さうして、激しくゲク／＼と泣き伏してしまつた。

犯  
罪  
者  
と  
妻

## 新妻の汚點

登美江は、ハツとした。

湯上りの長襦袢を着たまゝでお化粧を済まし、昨日結つたばかりの丸髷が、少し歪みかゝつてゐるのが氣になつて、鏡臺の抽斗から櫛と合せ鏡とを取出さうとすると、多分、櫛の齒がひつかつたのだらう。紫ビロードの指環のサツクが、浅い抽斗の底を、ボンと飛び出した。そして運の悪いことには、途端にそのサツクの蓋が開いて、良人に見せてはならぬ管の指環が、コロコロと臺の上を轉がつて行つたのだつた。

隆也は、食卓の横へ頬杖をついて寝をべつて、呑気に夕刊をひろげながら、實は美しい新妻の湯上り姿を、ウツトリしたやうに眺めてゐたところである。

指環は、隆也の鼻の先にある夕刊小説の挿繪の上へ行つて、キラリと眩しく光りながらとまつた。登美江は、鏡臺から良人の方へ胸と顔とを振り曲げて、ああ、困つた……とは思ひながら、それを拾ひ上げたり隠してしまつたりするほどの餘裕がない。

「何だ、これは？」

隆也は、何氣なく手を伸ばして、指環をヒョイとつまんで拾ひ上げると、

「オヤ——」

といった顔付き。二度三度手のひらの上で指環をひっくり返して見て、急に妻の方へ視線を向けた。

「登美江！」

「はい……」

「これは、どうしたんだ。」

「……………」

「指環だね。プラチナの、しかも、ダイヤ入りだ。」

「はい……」

「こんな指環を、僕は君に買ってやった覚えはない。君も、こんな立派なダイヤ入りの指環なんか、持つてゐるとはいはなかつた。この指環、どうしたのだ？」

「は……」

登美江は、返事が出来ずに、顔を真顔にしたまゝ俯向いてしまった。

何ともいへず、恐ろしい瞬間である。

彼女には、今良人が、どんな顔をして自分を見詰めてゐるのか、判り過ぎるほど判つてゐて、

それをどうすることも出来なかつた。指環は、忌まはしい過去の記念である。とうにもう、人にやるか捨てゝしまふか、ひそかに処分して置かねばならぬものだつた。それが、不注意にも、良人の眼の先きへ轉がり出すとは——。

隆也は、ガバと身を起して、坐り直した。顔色を蒼くし、額額の筋肉をピク／＼と顫はせて、キツと妻の項を見据ゑてゐた。

「登美江——」

「……………」

「こちらを向け。真直ぐに、僕の顔を見て見る。——ウム、見られまい。お前、僕の顔に泥を塗つたな！」

「……………」

「指環は、どうした指環だ！ それをいへ。いつて見る！ お前は……お前は、この指環を、誰から貰つたんだ！」

登美江は、矢張り答へられない。

答へたらその言葉は、いや、その事實は、正しく良人の顔へ泥を塗つたことになる。彼女の口からでは、どうにも、答へやうのないことなのだつた。

彼女は、長襦袢の袖をギョツと噛みしめて、急にその場へ泣き伏した。

僅かに先程まで——この指環が、良人隆也の眼に觸れる一瞬間前までは、あのやうにも和やかに楽しく彼等二人の新婚生活を押し包んでゐた甘い空気が、忽ち、氷のやうな冷たさで吹き拂はれてゐる。残るものはたゞ、忌まはしく穢らはしい妻の過去と、身體ぢうぶつゝ燃え沸らせるやうな、そしてそれも無理はない、激しい良人の憤怒だけである。隆也は、指環を、押し潰すほどにも強く握りしめて、その拳を、ワナ／＼と顔はせてゐるのだつた。

「登美江！ 俺はナ、今までのうち、誰から何をいはれようと、ちつと我慢し續けて来た。イヤ、我慢したのぢやない。俺は、お前を愛してゐた。愛してゐたから、はたの者が何をいはうと、それを取上げたり信じたりする気にはなれなかつた。——が、会社の奴等は、どんなことをいつたと思ふ、ええ、登美江！ 奴等は、俺が、社長のお古を頂戴して、お古だとは知らずに、鼻の下を長くしてゐるんだといつて、しよつちう蔭口を叩いてゐるのだ。わざと俺に聞えよがしの態度で、さういふことをいふ奴もある。俺は……俺は……それを、たゞ彼等の愚劣な嫉妬だとばかり思つてゐた。みんなが、美しいタイピストのお前を狙つてゐて、結局俺がお前を手に入れてしまつたものだから、その揚句の彼等の嫉妬が、さういふあらぬ噂になつたのだと、俺は自惚れて考へてゐた。お前一人を、信じ愛してゐた……」

「す、すみません……あなた……」

「すまないつて、フフ、フフ、すまないといふのなら、ぢや、この指環は、どうしたんだ！ 会社の同僚の、俺とは一番親しくしてゐる男が、これは蔭口でなくて、親切で俺にいつて呉れたことがある。——ねえ君、君は、君の細君について、もし注意した方がいゝやうだよ。細君は、君と結婚する前に、ある日社長室へ呼ばれて、社長からダイヤ入りの指環を買つたことがあるさうだよ。指環を買ふところを、偶然に見てゐた者があつたさうだ。悪いことはいはん、不愉快だらうが、細君に、もつと氣をつけてゐなくちやいけないね——と、かういつて呉れたのだ。お前だつてその時のことは覚えてゐる筈だ。……俺は、会社から歸つて来ると、先づそれとなしに、お前がダイヤ入りの指環を持つてゐるかどうか訊いて見たが、するとお前は、何といつた？ ダイヤ入りの指環なんて、そんな値段の高いものは、まだ一ぺんも指へ嵌めたことがない……手にとつて見たことさへないといつたではないか。俺は、お前のその言葉だけで、すぐにもう安心して、よし／＼、それぢや今年のボーナスが入つたら、俺がお前に、ダイヤの指環ぐらゐ買つてやらうと考へてゐた。——だのに、この……この指環はどうしたんだ。手にとつて見たことさへないダイヤ入りの指環が、ちやんとお前の鏡臺の底へ、今まで隠してあつたんぢやないか！ 畜生、畜生、貴様は、矢つ張り、社長のお古だつたんだ！」

感情に激して、隆也は、火のやうな言葉を浴せかける。  
そしてその言葉は、一つ／＼、登美江の胸を鋭く刺る。

悲しくも、事實は、隆也のいふ通りだつた。彼女は、タイピストとして勤めてゐたR貿易商會の社長のため、たつた一度ではあつたけれども、狡猾卑劣な策略づくめの手段で、生涯拭ふことの出来ぬやうな辱かしめを受けてゐた。ダイヤの指環は、そのあとで社長が、詫びの印しだといつて渡して呉れたものである。忌まはしいその時の記念品を、捨てしまへばよかつたのに、女心の淺間しさ、さすがに捨てかねてゐたのが悪かつたともいへる。自分は、良人隆也をどんなに深く愛してゐることか。さうして愛してゐる故にこそ、この暗い惨めな自分の秘密は打明けかねた。打開けて、許しを乞うてゐたら、まだしもよかつたか知れない。打明けぬうちに、動きのとれぬ證據を、グイと、良人の手で押へられたのだ――。

隆也は、唇を、血の出るほどに噛んで、憎々しさに妻を見詰めてゐた。

妻は、泣き伏したまゝ、良人の視線に耐へられず、顔を上げることも出来なかつた。

ふいに良人は、

『よし！』  
といつて立上つたが、隣室の洋服箆の前へ行くと、手早く、外出の支度をし始めた。

『あなた……』

登美江は、止めることも出来ず、僅かにさういつて、良人を眺めた。

『何だ、何の用だ！ 登美江、俺はナ、これから、社長のところへ行つて来る。社長に會つて、ダイヤ入りの指環と、お前の身體とを、綺麗サツパリ、あの豚社長に返してやるのだ。借りたものは返すのがいゝ。返してやつて、その上で俺は、社長との話をつけて来るんだ。止め立てすると承知せんぞ！』

隆也は、いきり立つていつて、還音も荒々しく玄關へ行く。そして、バタ／＼あとを追つた登

美江が、僅かに良人のレインコートの裾を掴んで引止めようとする時、

『放せ！ バカー！ お前なぞの穢れた手を、俺の身體へつけて呉れるな！』

妻をその場へ突き飛ばして置いて、風のやうに夜の街へ飛び出して行つてしまつた。

## 争ひの果

登美江は、深い／＼絶望の淵へ、一氣に突き落されたやうな氣持だつた。玄關の上り框に突つ伏したまゝ、

『もう、駄目だ。何もかも、おしまひになつてしまつた……』

長いこと、ゲク／＼聲を立て、泣いてゐたが、泣いたところで、どうなるといふものではない。彼女は、自分を今夜のこの破滅へ突き落した、R貿易商會の社長のことが、憎くて憎くて堪まらなくなり、と同時に、良人隆也と社長との間に、どんな騒ぎが持上るか、それも心配になつて來た。

『あの人は、短氣だ。怒つて、飛び出して行つたのは無理もないが、向ふへ行つてから、社長を良人が詰つたところで、社長も、赧ら顔の、憎らしいほど剛腹な男だ。オメ／＼と、あの人の前へ手をついて謝まりはすまい。——とすれば、二人の間には、何が起るだらう。』

考へるとそれは、居ても立つてもゐられないほどの氣持である。この場合、社長の不徳を責め、恨みをいふためになら、良人よりも、先づ自分が社長の前へ立つて、彼を面罵してやらねばならぬところではないか。良人を行かせるではなかつた。踏み倒されようが振ぢ伏せられようが、兎に角良人は引止めて置いて、自分が、向ふへ行くべきだつた。さうだ、さうだ、只かうして、泣き伏してゐるところではない——。

既に良人は出掛けて行つてしまつたあと、何か知らぬ取返しのかね、悪いことが起つてゐるやうな不安を舞々と感じ、彼女は、涙を拭いて立上ると、急いで外出の身仕度を整へた。さうして外へ出るとすぐタクシーを拾つて、

『目黒までやつて頂戴。全速力よ。料料だつたら、あたし、いくらでも拂ふわ。』  
がむしやらかな口調で運転手にいつた。

實際、何が何だか、ひどく捨鉢な氣持も手傳つてゐたし、途中でタクシーが衝突でもしたら、それも反つていゝだらう、あたしは、死んでしまへるのだと、そんな考へも、チラリと湧いて來たくらゐだつた。

生憎と、自動車は、ノロ／＼走つてゐる。

急がせても／＼、規定以上の速力はなか／＼出さない。

彼女の家は三田にあつて、そこから目黒まで、たつぷりと三十分以上もかゝつたやうに思はれた。

それでも、漸くのことだ。

『こゝでいゝわ。降ろして頂戴。』

自動車を乗り捨てたのが、目黒の奥の舊競馬場の近くで、そこから右手の方の道を暫らく行くと、四隣はひどく暗くぼけて、ダラ／＼曲りくねつた坂が續き、その坂を下り切つたところに、コンクリートの塀を高々と廻らした、立派やかな邸があつた。

それが、R貿易商會の社長、綿貫善太郎の住居である。



登美江は、門の前へ立つた時、どういふつもりだったか自分でも解らず、そつと附近を見廻して、人氣のないのを確かめた。それから、潜り戸を押して、門の内へ入つた。若しかしたら、良人と社長とが、聲高に何か言争つてゐて、その聲が聞えて來はしまいかなどと思はれたが、邸内は、植込みを透かして、ボンヤリした明るみが見えてゐるだけである。

彼女は、門の眞向ふの、岩の山と松と棕櫚の木とで作られた成金趣味の車廻しを、左手から廻つて行つて、玄關のすぐ前へ出たが、頑丈な扉の横の呼鈴へ手を觸れようとして、ハツと息を嚙んだ。

うしろで、何か、人の氣配がした。

さうして、振向いて見ると、向ふの楓の木の根本に、良人隆也が、スツクとイんでゐるのだつた。

「まア、あなた！」

と彼女は、遠慮勝ちに呼んだつもりだったが、その聲は小さく、多分、聞えなかつたことだらう。それに隆也は、暗いポーチの光の中で、殊にその光を、登美江の方は背中に背負つてゐるのだし、正しくこちらの顔を認めたかどうか判らない。一瞬間彼は、

「……………」

何か、答へようとしたらしくも見え、しかし、何もいはなかつた。頬のあたりの筋肉を、變てこにビク／＼と引き歪めたかと思ふと、急に、クルリと門の方を向いて、バタ／＼そこを走り出してしまつた。

「待つて頂戴！ ねえ、あなた……あんまりだわ！」

彼女は、またしても、半分泣聲だつた。

自分も急いであとを追はうとして、フェルトの草履が、這つて重たくて、脱ぎ捨て、しまひたいほどの氣持である。門へ引返さうとすると、今度は、車廻しの右手へ出たので、その時に、はじめ、ある恐ろしいものを發見してしまつた。

それは、今の今、隆也が、ヌツと立つてゐた場所である。

古い楓の木が、頭の上まで枝を伸ばしてゐて、その下に、黒い大きなものが、長々と倒れてゐる。彼女は、危ふく、それに躓きさうになつて、ギョクンと瞳を据ゑた。さうして怖々腰を踏み

ると、

「ひえッ！」

とばかり、飛び退いた。倒れてゐたのは、社長、綿貫善太郎である。憎らしい社長は、眼をむき出し、齒をギユツと喰

ひ縛つて、しかも、胸のあたり一面の血のりになつて倒れてゐる。そのそばに、七首やうの刃物が、ポトリと落ちてゐるのさへ、どうしてか彼女は、ひどくハツキリと見ることが出来た。彼女は、もう、良人のあとを追へなかつた。しーんと頭の中が凍りついたやうな気がし、ヘナヘナと腰が崩れかゝつて、それもまた、何をするつもりだつたか判らない。落ちてゐた七首を、ズルリと地べたから拾ひあげると、それを持つたまゝ、フラ／＼、社長の死顔を覗きに行つた。怖いとか、不気味とか、さういふ感じより先きに、何か考へねばならぬことが山のやうにあると思ひ、しかし、實際は、何も纏つたことを考へたのではない。おまけにそれは、極く僅かな時間だつたらう。その場にちつと立ち竦んでゐるうちに、彼女は、ふと気がつく、手に血まみれの七首を持つてゐたので、拂ひ落すやうにそれを地べたへ捨てた。さうして、次には、何をしたらいいのだらう。聲をあげて人を呼ぶか、それとも、黙つてこゝを立去るか、はじめて、そんなことを思案し始めると、その時に、庭の植込みを内庭の方から廻つて、誰かがスト／＼とやつて来る氣配がする。

『さうだ、いけないんだ。このまゝでゐては、何か悪いことになる——』  
ふつと、さう思つたものゝ、その時は既に遅い。

内庭の方からの足音は、忽ち、身近かへ迫つてゐた。』

さうして、植込みのうちからヌツと顔をさし出したのは、見上げるほど恰幅の大きい、書生體の男である。書生は、眞向きに、逃げ場を失つた登美江の前へ立つと、早くも、地上に横たはつてゐる不気味な死體を見つけたらしい。彼は、眼も鼻も口も、ひどく寸伸びのした、間抜けみないな顔附の男だつたが、ボンヤリした瞳のうちに、死體と登美江の顔とを幾度も見較べ、一寸、當惑したやうにして首を傾げたかと思ふと、

『オーイ、人殺しだア、誰か来オい！ 旦那様が殺されてゐるウ……』  
竹筒を吹くやうな聲で叫び始めた。

登美江は、もう、何がどうならうと、このまゝで立去ることの出来ぬ立場である。書生の叫び聲で、邸内は、俄かに騒然として來た。さうして、女中や、運轉手や、下男などが、あちらこちらから、一度に集まつて來た。

皆、倒れてゐた綿貫社長の顔を覗き込み、口々に、何かガヤ／＼と罵り立てたが、そのうちに、登美江の腕をムズと掴んだのは、さつきの書生だつた。  
『こいつ、太い奴だ。この女が、旦那様を殺したんだ！』  
書生は、手柄顔でいつてゐる。  
『違ひます。あたしぢやありません。』

「ナニ、違ふつて？　ぢや、誰だ、誰が旦那様を殺したんだ。」

「あたし、来て見て、この死體を、見付けただけなんですから。」

「フン。だからさ。だから、お前さんでなくて、ほかの誰がやつたのかと訊いてゐるんだ、ええ？」

腕を、振り曲げるやうにされたので、登美江は「痛つ！」と思ひながら、何も答へられない。

彼女は、良人隆也の、慌しく立去つた姿を、改めてハツキリと思ひ出してゐた。こゝへ駈けつける前に感じてゐた不安は、今や如實に、しかも豫期以上恐ろしい結果となつて現れたのである。良人が、腹を立てたのは無理がない。でも、でも、これほどまで、思ひ切つたことをやらうとは――。

「言抜けしようつたつて、駄目の皮だぞ。お前さんの手を見る。手に、血がついてゐるよ。」と書生はいつて、女中や運轉手の方を振り向くと、

「なアに、僕はね、ポツ／＼、門の潜りを戸締りしてしまはうと思つてやつて來たのだ。さうしたら、この女が、旦那様の死體の前で、ボンヤリ、氣の抜けたやうな顔をして立つてゐたものだから。」得意氣に説明してゐる。

登美江は、ふいに、ガツクリ首を垂れた。そして、

「ええ、さうです、あたしです。憎い、黙みたいな社長を殺したのは、このあたしです。ほかに、誰も――誰も、ゐやしません。」

殆んど聴きとれぬほどの低い聲でいつた。

### 罪を着る

醫者が來たが、その醫者は、綿貫社長が既に全く絆切れてゐて、手當ての施しやうがないといひ、猶、死體は、絶命してからまだいくらかも時間が絶つてゐないといつた。

醫者と殆んど同時に駈けつけて來た警察官達は、型の如く現場を臨檢し、兇器その他の證據物件の蒐集を終り、そのあと登美江を目黒署へ連れて行つたが、この時登美江は、相變らず紙のやうに蒼ざめた顔のうちにも、すつかりともう、一種の諦らめや落着きの色を示してゐた。

はじめに、指紋をとられ、帯の間から秋の中内懐中まで、身體検査をされて、調べ室へ呼び出された時は、自分が今良人隆也のため、いかに重大な立場に立つてゐるか意識して、その立場を、どんなにでもしてうまく守り通すやう、胸のうちへ、ひそかな勇氣さへ湧いて來てゐるのだつた。

係官から、名前や住所や年齢が、先づ訊ねられた。

ありのまゝに、彼女はそれに答へた。

現場で、綿貫社長を殺したのは自分だつたと、彼女自身の口から申立てられたことにつき、事實それに相違ないのかと念を押され、

「はい、その通りです。私が殺したに違ひありません。」

一生懸命、氣を張つて答へた。

係官は、顎が四角で、剛さうな髯を生やした、しかし口調の物柔らかな、有賀といふ警部だつた。警部は、絶えずこの殺人罪を犯したといふ女の一舉一動に、細かく詮索的な視線を放ちながら、だん／＼に訊問を押し進めた。

「君が、被害者を刺し殺したといふ、その時の状況を詳しくいつて見給へ。」

「あたし、何だか夢中でした、何も詳しく申すことは出来ません。ただ、矢鱈に、匕首で胸のへんを刺しましたら、向ふへドタリと倒れてしまひました。」

「何だか、ひどくボンヤリした答へのやうだが、いつたい君が社長を殺した、その動機は、何だね。」

「動機は、社長を、わたくしが憎んでゐたからでございます。——なぜ憎んでゐたか、それはあたし申せません。そのことは、どうぞ、ほかでお調べ下さい。」

『ほかで調べると判ることかね。』

『はい——』

「判るならいゝが、ちや、君の旦那さんでも連れて来て調べることにしてしよう。君の旦那さんは、家にゐるのだらうね。」

『はい、はい——』

「君の家の方は、もう警察から調べが行つてゐる筈なんだ。——實をいふと、君の申立ては甚だ曖昧のやうだ。それに、どうも今夜の殺人は、女の細腕やなんかで行なはれたものではないらしいといふ見解もある。君は嘘をいつてゐるのだらう。社長を殺したのは、君ちやあるまい。」

「いえ、いえ、それはあたし、本當のことです。本當にあたしが殺しました。」

「フム。ちや、さういふなら繰返し訊くが、社長を君が殺した時、社長とどういふ工合にして會つたのか、それを先づいつて見給へ。あんな支離先きで會つたのは、前から約束してあつて、君が訪ねて行つたのか、それとも、君が訪ねて行くと、偶然に社長が出て來たのか——」

「そ、それは……あたしくし、はじめは電話をかけて……いえ、電話ちやありませんでした。電話をかけようかと思つたんですけれど、都合があつて……そして、そのあとのことは、申せません。たゞ、あたしくし、社長とあそこで會つたものですから……」

細かい前後の模様まで、曇みかけて追求されると、申立てが、次第にしどろもどろになるのは已むを得ない。事實と符合しない申立てをすると、嘘は、一べんで露れてしまふ。彼女は、出来るだけ、辻褄を合せるやう、さうして、どうやら辻褄が合ひさうもなくて、事實と食ひ違ひがありさうな箇所へ出會す度、總て答辯を拒否してしまひ、何でもかんでも、自分だけが社長殺しの犯人だと見做されるやう、汗みづくの努力を續けた。

残念なことにその態度は、誰が見ても、何か知らぬ彼女が、嘘を言拵らへてゐるものとしか見えなかつたやう。

係官一側としては、この時まで、彼女の供述を、全部が全部嘘だともいへず、それは、現場で押収した刃渡り四寸ほどの兇器の柄に、ハッキリと彼女の指紋がついてゐたためでもあつたが、といつて、供述のどこまでが本當でどこから先が嘘なのか、よく判らない、その點を一刻も早く見極めねばならぬことゝなつた。

自稱犯人登美江の訊問が進められる一方、有賀警部は、綿貫家の家人について、一人々々、その時の模様を問ひ糺して見たが、どうしてだか綿貫家では、誰も矢張り、當局が要求してゐるだけの満足な答へをするものがなく、しかし、現場で登美江を捕へた、例の寸伸びした顔附の書生だけは、大體次のやうな申立てをした。

「へい、私は、角田平馬といふものです。綿貫さんのお邸には、かなり前から勤めてゐまして、旦那様からは大變信用して戴いてをります。お邸では、二年ほど前に奥様が亡くなられて、目下旦那様は、男、裸みたいなものでございますが、別にお子様もありませんし、従つて相續人もきまつてゐず、旦那様がかういふことになつてしまつたあとは、定めし親戚の方などが集まつて、いろ／＼面倒なことが持上りはしないかと心配してをります。——今夜、旦那様が殺された時は、正直を申すと、女中達は奥の方にゐて、ラヂオを聞いてゐたやうでございますし、私と、下男と、運轉手の三人は、矢張り奥の方の別の部屋で、下らない世間話に夢中になつてをりましたので、殆んど何も知らなかつたやうな始末でございます。物音や叫び聲も聞きません。旦那様は、寝る前に、庭のうちなどを、時々お廻りになる癖がありますし、恰度さういふ時に、あの女が、木の蔭からでも飛び出して、旦那様を刺し殺したといふやうなわけはございませんでしたらうか。——同じ家にて、何も知らずにゐたといふのは、いかにも迂濶千萬な話ですが、その點全く申譯ございません。」

書生とはいふものゝ、この男はもう相當の年配で、書生兼家扶といつたやうな役柄をしてゐたらしく、いかにも恐縮し切つた顔附である。

調べて見ると、その時、書生と下男と運轉手とが、世間話をしてゐたといふ部屋は、實のところ

る、邸内のあまり奥ではない。玄關を入つて、僅かに二間ほど奥へ行つたところだつたが、そこ  
にゐて、なぜ表玄關での騒ぎを知らずにゐたのか、その點は、多少疑問の餘地がないではな  
い。係官達は、この時にしかし、さういふ些細な疑問などについて、あれこれと調査の手を伸  
べるより先きに、もつと緊急な、他の手配の方へ全力をそゝがねばならなかつたといふのが、そ  
の夜の明け方、犯人登美江の自宅へ赴いた刑事達が、捜査本部の目黒署へ、漸くにして戻つて來  
ると、

「女の亭主といふのが、をりません。ずつと張込みを續けましたが、昨夜中、自分の家へ歸つて  
來ないんです。どこかへ、逃亡したらしい形跡が、十分あると思ふんですが。」

さういふ報告を、緊張し切つて、齎らしたからだつた。

報告は、それだけでも、何か知らず事件の内容について、暗示を與へるやうな性質のものであ  
る。

登美江の良人がゐないと聞いて當局は、この良人と綿貫社長との間に、何かの悶着がありはし  
なかつたらうか、即刻調査にかゝつた。さうしてその結果すぐに判つて來たのは、R貿易商  
會のうちに、社長とタイピストとの間に、かつて、いろ／＼な噂があつたといふ事實だつた。

「ふーん、なるほどな。それでどうやら、事件の性質は判つて來たぞ。こいつア、何よりも先き

に、その隆也といふ男の行方を探し出さなやいかん。隆也と綿貫社長との間に問題があるんだ。  
女の細腕ぢや、とても出來さうにもない人殺しだし、ひよつとすると、女は事件中の傀儡だ。或  
は、單なる良人の身代りだ。社長を殺したのは、隆也かも知れない。」

登美江の折角の苦心も水の泡、有賀警部は、早くも眞相を、看破しかけたくらゐである。

警部は、登美江を、調べ室へ引つ張つて來た。

「ねえ、君、もういゝ加減で、ありのまゝのことをいつた方がよくはないかね。」

「ありのまゝと仰有いますと？」

「つまり、綿貫社長を殺したのは、君ぢやなくて、君の旦那さんだといふことさ。」

ギョツとして登美江は警部の顔を見上げ、しかしそれは、半ば以上覺悟してゐた。遅かれ早か  
れ、さういふ訊問をされる時が來るのを、強ち、豫期しないわけでもなかつた。

「違ひます。社長さんを殺したのはあたくしです。あたしが、人殺しをした女です。」

必死の語氣で彼女はいひ、

「フン。」警部は、鼻の先きで笑つた。「よからう。強情を張るつもりなら、いくらでも強情を張  
つてゐ給へ。僕等の方ぢや、ちきと君の旦那さんを、探し出して見せるから。」

## 真相闡明

登美江よりも、隆也の方へ、既に餘計に嫌疑がかゝつて来た今となつては、登美江がいかに強情を張つて見たところで、それは無駄なやうなものであつたかも知れない。

しかし彼女は、猶數日間、目黒署に留置されてゐた。さうしてこの間に、幾度か同じやうな訊問を繰返され、幾度か、同じやうな申立てをした。彼女の觀察したところによると、當局は、まだ隆也の行方が判らないので、ひどく當惑してゐるやうである。彼女は、良人の行方を知つてゐるのではないかといつて訊ねられ、それは嘘も隠しもない、本當に知らないのだと答へた。

恰度、留置場の生活が一週間続いたある日のこと。

その頃には、當局ばかりでなく、彼女自身も、良人がどこへ身を隠してゐるか心配になり出し、若しかしたら良人は、綿貫社長を殺したあと、逃げ場を失なつて、自殺でも遂げたのではないかといふやうな、新しい不安すら感じ始めてゐたほどだつたが、彼女は、いつも通り有賀警部の前へ呼び出され、もう何十週か飽かずに繰返された訊問を受けた時、ふと、有賀警部の机の上、意外なものが載つてゐるのを見付けた。

紫ビロードのサツクに入つた、ダイヤ入りの指環である。

形も、大きさも、またサツクも、ハッキリした見覚えがある。それは、あの忌まはしい問題の指環だつた。

——あれだ！ あの指環だ！ あれは、良人が、社長に叩きつけてやるといつて持つて行つたものだ。あれがこゝにあるといふのは、では、愈々良人が、警察へ連れて來られたのか——

サツと變つた彼女の顔色を見て、警部の方では、少なからず怪訝に思つたらしい。

「……その指環、どうしたのでございませうか……」

思はず登美江が訊いて見ると、

「え、これかい。こりやね。」警部は、チロ／＼指環と登美江の顔とを見較べていつた。「今朝、手に入つたもので、一寸面白い點があるにはあるよ。」

「面白い——と申しますと？」

「なアにね、拾得物なんだ。拾つて届け出た者があるわけなんだが、指環よりは、サツクの中に紙つ片が一枚、小さく折り疊んで入つてゐて、その紙の方が面白いのでね。紙を広げて見ると、字が書いてある。お馴染み甲斐に、見せてあげよう。」

さうして警部が、机の抽斗から取出して見せた紙は、新聞か雑誌のやうなものの端つこを、小さく裂き取つたものらしく、それに鉛筆で、

——助けを求む——

ひどく亂暴な筆蹟で書いてあるのだつた。

登美江は、その筆蹟にもまた見覚えがあつた。紛れもなくそれは良人の筆蹟である。讀み下しながら、彼女の顔は、眞蒼になつた。

『この紙が、指環のサツクの中に入つてゐたのでございますか。』

『ウム、さうだよ。まあね、誰かの悪戯だとすれば悪戯にもなるが、助けを求むつてのは穩やかぢやない。第一、ダイヤ入りの指環だからね、かういふ貴重なものの中へ、助けを求むなんて書いた紙を入れて落として置いたのは、考へやうによつては容易ならんことだ。女か何かと誘拐されて、どこかへ連れて行かれる途中で、手にはめてゐた指環を利用して、助けを求めるといふこともないぢやないからね。』

一瞬間、彼女は、黙つてゐた。

隆也について、今までは、全然思つても見なかつたやうなことが、突然起つて來たのである。

良人は、助けを求めてゐる。その助けとは、何の意味か。いづれにもせよそれは、このまゝで、見過ごしに出來ぬことではないか。

『女ではありません！』とふいに、彼女はいつた。

『え、なに、女ではないつて？』

『女ではございません。その指環は、良人が持つて行つた筈のものでございます。——お願いです。良人の居所を、早く、探し出して下さいませ！』

後に語つたところによると、警部は、頭をガンと殴られたやうな氣持がしたとのことだつた。

實際警部は、その指環と綿貫社長殺人事件とが、聊かでも關係があらうとは、夢にも思はずゐたのだつた。

登美江は、氣違ひのやうになつて、指環に絡まる、良人と自分とのいさかひの顛末を話した。

もう、社長と、自分とのことも、隠してゐるわけに行かなかつた。

それを聞きながら、警部は、激しく机上の呼鈴を鳴らして、今朝、指環の拾得物届出を取扱つた、係りの捜査を呼びつけた。

その捜査の説明によると、指環は、目黒の奥の、例の綿貫家からは西へ十町ほども行つたところにある、とある空地の中央に建てられた、洋館紛ひの家の横手で發見されたもので、拾つたのは、朝早くそこを通りかゝつたクリーニング屋の配達だつたといふ。

『クリーニング屋がいつてましたが、その洋館といふのは、立腐れ同然のもので、誰も人は住んでゐないさうです。そんな家の横手に、どうしてこの指環が落ちてゐたのか……何でも、洋館の



ぐるりには、壊れかゝつたコンクリートの塀があつて、塀の外をクリーニング屋が自轉車に乗つて通りかゝると、コツンとうしろで音がしたやうな気がし、振り向くと、こいつが落ちてゐたんださうです。』

巡查が、皆まで説明するのを待たず、警部は、頭から激しく呷鳴つた。

『バカー！ 阿呆！ コツンと音がしたつてのなら、そりや、その洋館の二階から投げて寄越したものに違ひないぢやないか。——さういふことが判つてゐるのなら、なぜ、早くそのことをいはん。バカー！ 阿呆！——すぐにその洋館のうちの捜索せえ！』

手配は、迅速だつた。

警部が、自ら先頭に立つて、數名の刑事が問題の洋館へ駆けつけた時、その洋館の二階で発見したものは、口へ猿轡やうのものを嵌められて、手足を縛られ、氣息奄々として床に横たはつてゐた隆也である。隆也は、事件以来一週間ずつとそこに閉ぢ籠められてゐて、今朝、明け方に、見張りの者の隙を窺ひ、辛くも手首の繩だけを外すことが出来たので、その時、指環を窓から投げたが、あとではちきに繩の緩んでゐるのを発見され、前よりも一層嚴重に手足を縛られ、今は殆んど、死ぬのを待つやうな状態だつたといふのだつた。

いつたい彼が、なぜこんな状態で発見されねばならなかつたか、誰にもそれは解らない。隆也

は、繩を解いて貰ひ、猿轡を外されると、病人のやうに弱り切つた聲でいつた。

『綿貫家の、下男と運轉手と書生とを、つかまへて下さい。あいつ等が、三人共謀の仕業です。』

綿貫社長を殺したのもあいつ等です。——僕は、あの晩に、社長を面詰してやりたいことがあつて、社長に會ひに行つたのですけれど、はじめ行つた時は、書生が出て来て、社長は留守だといひました。塀の外を暫らく歩いてゐると、どうも留守ではないやうな気がするし、それでも何分間か躊躇しいく、一度目黒驛の方へ歸りかけたのを、また社長の家まで引返すと、それが恰度、奴等三人で、社長を殺してしまつたところでした。

——はじめ僕は、何気なく、社長の家の玄関先へ入つて行つて、その時にもう、チラツと奴等の顔を見てしまつたわけです。奴等は、僕に顔を見られたと知つて、一旦植込みの奥へ逃げたやうですが、僕は、そこに社長が殺されてゐるあんまり意外な光景で、この際どうしたらいいのか狼狽してしまひました。兎に角、警察へ行つて事件を知らせたらと思ひつき、一散に社長の邸を飛び出したのですが、途中のダラ／＼坂にかゝつたところで、ふいにうしろから、頭を小つびどく殴りつけられてしまひました。あとで正氣づいてから解つたのですが、あいつ等のうち、下男と運轉手とは、僕が表門から走り出すのを見て、顔を見知られたことだし、裏門からすぐとあとを追ひかけたのださうです。死體が発見されて、邸中がゴタ／＼大騒ぎをしてゐる間に、僕は、

綿貫家の物置へ一旦擔ぎ込まれて、ずつと氣を失なつてゐましたが、そのあとで、またこゝへ、南京米の袋をかぶせられて連れて來られました。

——奴等は、僕を殺さずに置いたのが、奴等の間に何か契約があつて、その契約を完全に遂行するまで、僕を生かして置くのだといふやうなことをいつてゐましたが、その契約がどんなことだか、僕にも解つてはゐません。いづれにもせよ、三人共謀でやつた仕業です。逃げないうちに、あいづらをつかまへてしまつて下さる。」

物置小屋へ擔ぎ込まれてゐた間にでも、なぜ隆也がそこにゐるのだと氣付かれなかつたか、それはあの時表玄關の現場で、早くも登美江が犯人として捕はれ、係官達は、その方へばかり氣をとられてゐたせゐである。隆也は、彼が綿貫邸を飛び出した時、登美江の姿を見た筈であるが、暗がり、それが登美江だとは殆んど氣付かず、たゞ、一刻も早く警察へ駆けつけようと、氣ばかり焦つてゐたとのことだつた。

刑事の一隊は、折返して綿貫家へ赴いた。

さうして、既に急を知つて、それ／＼逃げ出さうとしてゐた三人を、間一髪の差で、逮捕することが出来た。

逮捕して、ギニュー／＼係官に責めつけられて、最初に、泥を吐いたのは、家扶兼書生の角田

平馬である。平馬は、次のやうにいつた。

『へい、申譯ありません。かうなれば、覺悟をきめて申しますが、實際私共が三人で、社長を殺したに相違ありません。』

そして、それに續いて、運轉手の、名前を矢崎八十雄といふのが、バツを搔くやうにしてゐた。

『へ、へい、私も、何とも申譯がありません。實は、社長を殺したのは、私が一番罪が淺いので、私は角田と、下男の村島太一とに、無理矢理、手傳はされたやうなものでございます。』

——いつたい角田はもうずつと前から、社長の印鑑を偽造してゐて、社長からの信用も厚かつたのを幸ひ、かなり多額な金を自分の懐中へ入れてゐたのでございます。社長がどうやらそれに氣がついた様子で、さうすると、角田は、はじめに村島を誘ひ込んで、いつかは社長を殺つつけようとして相談し、恰度にあの晩は、社長が愈々ハツキリと、角田の不正を詰つて叱りつけたので、到頭玄關先きであんなことになつてしまつたのでございます。社長を殺して、罪はあの女に塗りつけましたが、一方では、その場で私達の顔を見た男がゐるし、この男も、連れて來て監禁して置いて、あとで殺してしまはうといふのが、角田と村島との意見でしたが、私は、角田がはじめに約束した預け前の金を渡して呉れず、ですから、その約束の履行されるまでは、證人をちやん

と生かして置いて、いざといふ場合には、この證人にものをいはせて、角田達の悪事を發いてやるつもり。實は、夜の目も寝ずに、證人の張り番をしてゐたやうなものでした。私が張り番してゐた意味は、逃げられるのを防いだゞけでは、決してありません。私といふものがゐなかつたら、角田にしる村島にしる、いつ洋館へ踏み込んで来て、社長の時と同様な、血腥い荒仕事をやつてしまつたものか判りません。それをさせないためだつたのです。』  
目的は別のところにあつた筈だらうけれど、事實に於て運轉手が、隆也の命を救つたことにな  
るのかも知れない。

係官は、あまりにも兇惡な彼等のやり方で、呆れ果てるほどだつた。

さうして、驚きは、更に登美江の方が、すつと大きかつたことだらう。

彼女は、留置所にゐて、良人が助かつたと聞き、また、良人が實は犯人ではない。犯人がほかにあつたのだと知つた時、思はずワアツと泣き出してしまつた。

たゞ一つ、留置所にゐたればこそ、あの指環で、良人の危急を知つたといふ手柄はあるけれど、そのほかでは、良人の身代りになつたつもりでゐたことが、全然無駄であり、しかしそれは、無駄でも何でもないのだつた。良人が無事でゐて呉れて、しかも、社長の死と無關係であつて呉れれば、それでもう十分の満足ではないか。

目黒署では、氣を利かして、いち早く彼女の留置を解いて呉れた。さうして、病院へ身柄を運ばれた良人のもとへ、すぐ行くやうにといつて呉れた。

だが、彼女は、警察を出ると、何か物思ひに沈んでゐて、フラ／＼、目黒驛の方へ歩き出したので、有賀警部は、ハツとしてあとを追ひかけた。

『君、どこへ行くのかね。旦那さんが君を待つとるだらう。病院へ早く行き給へ。』  
といつたが、彼女は、

『あたし、病院へは参りません。』

泣聲をおさへて、唇を血の出るほど噛みしめてゐる。

警部は、その悲しげな眼の色をちつと見詰めてゐて、ふいに彼女の腕を掴んだかと思ふと、

『いかん、いかん！ 君は、よろしくないぞ。君が今、そんなことをいつて、駄々をこねてゐる法はない。サア、僕と一緒に病院へ行き給へ。事件前のゴタ／＼は、總てもう解消だ……病院で、旦那さんが君を待つてゐないやうだつたら、よろしい、今度は、旦那さんを留置所へぶち込んでやる！』

自分でも、不覺に眼をうるませていつた。

事實病院で、隆也は、首を長くして妻の來るのを待つてゐたことゝ思はれる――。

血ち  
潮しほ  
の  
數すう  
字じ

### あてつけ自殺

寒が明けたとはいへ、まだ一向に暖かくはならない二月初旬のある夜、丹野恒吉は、

「ウーイ、畜生！　これで先づ、墓口の中に残るところは、根つきり葉つきり電車賃だけになった。ウツフ、なアに、電車賃さへありやカマキリの家へ行くのにや困らねえし、ウーイ、どうも、思つたよりいゝ氣持に酔つ拂つたぞ。この酔つ拂つたところでお陀佛と來りや、案外死ぬのも悪くはねえさ。ウーイ……」

浅草の明るい舗道を歩きながら、酒臭いゲツブとちやんぼんに、頻りとブツブツ呟いてゐた。

オーパーも服の上着も、帽子まで古着屋で賣り飛ばして、毛糸のジヤケツが一枚きりのみすばらしい恰好。

失職してからもう三ヶ月の餘になる。

探しても、自分に適當な職はないし、かといつて、職業紹介所などへ行つて仕事の口にあつたところで、生來が怠け者だし労働などやつたことがないし、力の要る仕事など出来はない。揚句が焼け糞になつて飲み歩いて、愈々今夜がこの世のおしまひ、アツサリ自殺してしまはうと考へてゐるところなのだつた。

もうちきに、映畫館の閉場する時刻なのだらう。  
街には、人通りが多かつた。

さうしてその人達は、皆、倅せさうな顔をしてゐて元氣だつた。

肥つた紳士、贅澤な黒狐の奥さん、さうして丸髭の若い細君を連れだした商人の男。

「チエツ、誰も彼も、結構楽しさうにしてゐやがら。この世の中で、俺だけが一人、ろくすつば着るものも無え始末で、愈々世間へおさらばをするといふことになつたんだが、畜生、考へるとこりや、ほかの誰のせゐでもねえ、皆んなあのカマキリ支配人のお蔭なんだ。あいつが俺を蹴にしたばかりで、俺はすつかりとあがきがつかなくなつた。ウーイツー！ 忌々しいのはあの瘦せつぼちの支配人だぞ。なんだ、あのカマキリめ！」

人々の幸福さうな有様を見ると、今度は急に氣が荒つぽくなつて、我知らず凄まじい呪咀の言葉が、口を突くやうにして飛び出して來たが、實はこれも、強ち無理でないところがある。丹野は、彼の所謂カマキリ支配人なる者に對して、少なからず恨みを持つてゐていゝ筋があるのだつた。

彼は、失職前、銀座にあるM商會、——有名な貴金屬商の店員だつた。さうして、生來酒好きで怠け者で、どうにも仕方のない男ではあつたけれど、寶石の鑑定については不思議に眼がよ

く利いたものだから、このためにM商會では、丹野をかなり優遇して雇つてゐたものだつた。彼は、ダイヤのカラットを、ちよいと掌へのせただけで、殆んど百分の一までの正確さで言ひ中てた。

翡翠やサファイヤの産地を、一眼見たゞけで知つてしまつた。

寶石の純度光澤、そして價格が、この男の眼の前では、絶対に胡魔化されることがない。實に便利な男だつたのである。

かういふ特別な技能を持つてゐる以上、彼が酒好きであらうと怠け者であらうと、M商會で、どんなに彼を威張らして置いたかは、およそ誰にでも想像がつくだらう。

丹野は、商會内で、ある場合に商會主以上の我儘をしてゐた。休みたい時はいつでも店を休み、店へはしよつちうブランドーだのウイスキーだのを持込んで、酔へば勝手にどこへでも寝た。さうしてしかも、飛切り高額の給金を貰つて、女も買ふし博奕も打つた。悪かつたのは最近に、店の支配人が變つてしまつて、彼のいふカマキリ支配人、豊田清助といふ人物が新しく店を切廻すやうになつたことである。

豊田支配人は、見たところ極めて平凡な風采の、たゞカマキリのやうに瘦せてゐるだけが特徴だといへばいへる、まことにつまらない人物のやうだつたが、店へ來て支配人として采配をふる

ひ始めると、間もなく丹野恒吉を、譬へいかに寶石の鑑定眼が優れてゐるにしても、このやうな不仕鱈な勤めぶりをする店員では、他のものに對して見せしめにならぬと言出して、斷然、識首してしまつた。心がけを改めて、もつと實直に勤めるか、それが厭なら即座に店を辭めて貰ひたいといふ話で、丹野としては、はじめからこの支配人が氣に喰はなかつた。實直になんて、そんなことア可笑しくつて出来ませんや、へい、ぢや、辭めますよといつて、中つ腹でM商會を飛出してしまつたやうなわけである。

『冗談も休み／＼いつて貰ひたいもんだ。俺だけの眼を持つた寶石鑑定家が、そこらにザラに有るかつてんだ。へん、見てゐやがれ、俺はどこの店へ行つたつて、まだ勤め口はいくらでもあるぞ。M商會ばかりに、おてんと様が照らす世の中ぢやあるまいし。』

店を飛び出した當座、無論丹野は腹の中では平氣の平左、こんなことを考へてゐたものだつたが、ところで世の中といふものは、さうこつちで考へるやうに、都合のよいやうにばかりは出来てゐない。

彼はそのうち、だん／＼困つて來た。

どうも、どこの寶石商へ行つて見ても、平生の素行の悪いことを知られてゐるから、雇つてくれるところがないのである。

三ヶ月間、彼は、もがきにもがいて、結局どうにもならなかつた。

困つたことには、寶石の鑑定よりほかに能がないから、揚句に、その日／＼の生活にも行き詰まつてしまつて、さてこゝで、焼けのやん八、この世におさらばを告げてやらうと決心したが、こゝでまた考へたのは、どうせ死ぬならカマキリ支配人への面當てに、一つこれから、カマキリ支配人の住んでゐる家まで出向いて行つて、その門前ででも首をくゞつて、プラーリ、ぶら下がつてやらうといふ考へである。甚だろくでもない決心ではあるが、親もなし子もなし妻もなし、獨身ものゝ氣安さで、かなり本氣になつてこの自殺を執行するつもりでゐたのだつた。

『えゝと、カマキリめ、家は鶴町だつたな。雷門へ出て電車へ乗つて、それからポツ／＼そつちへ出掛けるとするか。』

彼は考へながら仲見世へ出た。さうして、まだ相變らずポツ／＼言つたりゲツブをしたり、兎も角雷門の方へ出て行くと、こゝで、いとも意外なことによつたつてしまつた。

『あ、あなた、丹野さん。丹野さんでしたわね、まアしばらく。』  
突然、横から聲をかけて、懐しげにすり寄つて來た女がある。  
女は、年の頃二十四五歳。

洋装の、眼も覚めるやうな美人である。  
但し丹野には、全然見覚えのない女なのだつた。」

## 夢の一夜

『や、ど……どうも、しばらく……』

丹野は、ヘドモドして、挨拶を返してゐた。

先方からの、あまりにも親しげな挨拶で、見覚えのない女ではありながら、そのことをハツキリ言ふことが出来ない。心中、少なからず狼狽しながら、兎も角、いゝ加減にバツを合せるよりほかなかつたのである。

女は、素早い視線で、丹野のみすばらしい服装を見廻し、でもそれを、輕蔑したやうなところは少しもない。

寧ろ婉然として、笑ひかけたやうだつた。

『ねえ、丹野さん。あたしはあなたに、こゝで會へるなんて思はなかつたわよ。』

『そ、さうですか……』

『あなたがね、銀座のお店をやめてから、方々飲み歩いたりなんかして、何にもなさらずにゐる

つてこと、ちやんとよそで聞込んでゐるのよ。でもあたし、どうしてもあなたに會ひたくつて……』

『へえ……』

『まあね、あたしはとても嬉しいの。こゝであなたに會へたのは本望だわ。観音様へふつとお詣りに来る氣になつただけど、それがあなたに會へたつてのは、つまり観音様のお引合せみたいなもんだわね。あたしは、あなたに會つたら、是非話したいと思つてたことがあつてよ。さうして、あなたならあたしの助けになつて下さるし、またあたしなら、あなたの助けにもなれると考へてゐたのよ。——つまり、あなたとあたしとで、タイアップしなけりやならない事情が起つてゐるんだわ。』

『タイアップ？ タイアップつて、ど、どういふ？……』

『別の言葉でいへば共同戦線よ。共同戦線を張つて、一度にやつつけちはなけりやならない奴があるの。——えゝと、でも、こゝちや話が出來ないわ。あなた、あたしと一緒に、これからあたしの家まで行つて下さらない？』

『あなたの家つて？……』

『行つて見りや解つてよ。行けば、出来るだけの優遇はしてあげるわ。ね、お願いよ。一緒に行



つてよ。」

「え、ええ……そりや、行けといふなら、どこへ行つたつていふんですが。」  
「有難う。感謝するわ。さア、ちや、一緒に来てよ。」

丹野は、女が誰だつたのか、まだ思ひ出すことが出来ない。

さうしてしかし言はれるまゝ、フラ／＼一緒に歩き出してしまつた。

美しい洋装の女と肩を並べて、ジャケツ一枚の哀れに尾羽打枯らした失業者が歩いて行くのだから、この一組の男女は、少なからず通行人の注意を惹く。女は、それを避けるつもりだらう。一旦丹野を、仲見世裏の暗い路地のうちへ引つ張り込むやうにし、それから、傳法院の堀沿ひの淋しい横町の方へと出て、次に瓢箪池のふちを半廻りし、やがて巨大な國際劇場の方へ進んで行つたが、この道々、まだ何かいろ／＼と話しかけて来たので、この話のうちで丹野にも、どうやら臆氣に解つて来たことがないではなかつた。

女は、名前をまだ名乗らない。

身分も、明らさまには打明けない。

だが、兎も角丹野を、よほど前から知つてゐるらしいのである。

たゞ知つてゐるといふだけのことにしては、態度や言葉附きの、イヤに無遠慮で馴々しいの

が、甚だ腑に落ちかねる點でもあるが、その女の話すところによつて見ると、女が、最初に丹野を知つたのは、M商會へ指環か何かの買物に来て、その時からだつたといふやうな口調であつて、だとするならば丹野にも、多少の心當りがないでもない。彼はM商會にゐた時に顧客のため、いろ／＼と寶石の鑑定をしてやつたことがあるし、さういふ時にお相手をする客といふのは、何しろ寶石のことだから、大抵は富豪の夫人だとか令嬢だとか、上流社會の人達が多く、さういふ種類の婦人客に、しよつちう接してゐたものである。先づそれから考へて見て、この疑問の洋装の女が、悪くつてもどこかの一流どころの藝妓か何かであり、よければ女優、聲樂家、大きなカフェーのマダム、またはかして、華族富豪の令夫人かお妾、場合によつては、お金持の未亡人であるかも知れないといふやうなことが、だん／＼考へられて来るのであつた。

見れば女は、ハンド・バッグを胸へ抱いた左手の指に、ダイヤ入りの指環をはめてゐるが、そこは商賣柄ですぐと解る。

ダイヤは、相當に質のいゝ、一カラット近くの代物だつた。

「さうか、これだけのダイヤを持つてゐるのなら、先づ信用しても大丈夫だぞ。相手にして、どつちへ轉んだにしたところで、金無し文無し素つかからかんの俺にとつては、損の行く筈はない。向ふで馴々しくするのだから、こつちだつて何も、ビク／＼と遠慮してゐることは要らないだら

う。よし、なるやうになれ。この女のお相手を、十分に勤めてやれ。」  
丹野は、相手のハッキリした素性が判らないまゝで、だん／＼に度胸を据ゑてしまつたのだつた。

國際劇場前へ出ると女は、手をあげてタクシーを呼止めた。

さうして、丹野と一緒にそれへ乗り込んで、行先きを、

『本郷よ。少し急いでね。』

と吩咐けた。

車の中で丹野は、さつき女が、共同戦線だとかタイアップだとか、何か重大な話があるらしい口吻だつたのを思ひ出したので、それについて、當然までもつと話があるだらうと豫期してゐたが、女は、ふいに丹野の耳へ口を寄せると、

『ね、丹野さん。こゝでは、まだ黙つてゐてよ。大切な相談があるのだけれど、運轉手などに聴かれちや工合が悪いし、それに、相談は、明日の朝になつてからでも結構なの。——今夜は、あたしの言ふまゝになつて、氣樂にしてゐてくれゝばいゝんだわ。』

さう囁いたまきり、あとは何も大したことを言はない。

氣がつくと女は、その美しいくねくねした身體を、びつたり、丹野の方へにじり寄せるやうに

してゐた。

例のダイヤをはめた手が、ねつとりと暖かく、丹野の膝の上へかゝつてさへゐる。

丹野は、急に氣持が、上ずつて來た。

ついさつきまで、この世におさらばをしようと思つてゐたのに、そんなことはすつかりと忘れてしまひ、女の媚びを含んだ眼附や口もと。さうして玉のやうに滑らかな首のあたりの曲線を見て、何がなし、フーツと深い息を吐いた。

『でも、今夜は、思ひのほか寒いわね。』

と女は、突然氣がついたやうにしていふ。

『さう、寒いですね。まつたく……』

と丹野は無意味に答へて、そつと女の手を握りかけた。

『あら、いけないわ。』

と女は素早く手を引つ込めて、低く早口に囁いてゐる。

『待つてゐてよ。何もかも、仕事が終わつてからでないと駄目なんだわ。あなたとあだし、どうせタイアップしなきゃならないんだから……』

丹野は、變に胸のうちがドキドキしながら、舌なめずりをして、女の横顔を見てゐるよりほか

なかつた。

車は、ちきに、本郷へ着いたやうである。

二人は、やがて、本郷の裏通りの、無闇に道の折れ曲がつた、ガラ／＼坂を歩き出してゐた。「さア、来たわ。小ちやい家だけど、笑はないでね。事情があつて、こゝに暫らく住んでゐるよ。——でも、遠慮は要らないのだから入つてよ。」

と言ひながら、女が急に立ち停つたのは、なるほど小さな借家普請で、表に申譯ばかりの低い門がついてゐる、平家建ての家の前である。

「フン、こりや、少々見當違ひをしたのかな。これちやどうやらこの女は、大して身分のある女ぢやない。——が、構ふものか。俺にとつちや、身分なんぞどうでもいゝことなのだ。この美しい女さへありや、ほかに何がなくつてもいゝや。」

丹野は、ふて／＼しく、腹の底で考へた。

家の中へ入つてから、女は丹野に向つて、すぐそのみすばらしい服を脱げといつた。さうしてその代りに、ちやんと行丈の合つた丹前を押し入れから引つ張り出し、それをフーハリと、うしろからかけてくれた。

何だかまるで、自分の家へでも歸つたやうな氣持である。

「ね、あなた、お腹はどう？」

「イヤ、別に、空いてもゐませんが。」

「さう。それなら、矢つ張りお酒の方がいゝわね。丹野さん、お酒は、洋酒の方が好きだつたんでせう？」

いつてゐるところを見ると、女は、丹野のことについてなら、何もかも知つてゐるらしい。

食卓の上へ出された酒は、飛び切り上等のブランデー。

それに氣の利いたつまみ物の皿も載つてゐる。

「一つ、お酌よ。あとであたしにも少うしね。」

女は、流し眼に丹野を見て、くたりと横坐りにそこへ坐つてしまつた。彼は、勧め上手な女のため、その晩、ぐい／＼と浴びるやうに酒を飲まされた。さうして、いつか、ぐた／＼に酔つ拂つてつぶれてしまつた。

### カマキリ退治

「どうでした、昨夜は、よくお寝みになれて？」

「え、ええ、ぐつすりと、前後不覺ですよ。近頃になく眠りました。今、何時ですか。」

『もう、晝過ぎよ。ちきにもう、三時頃になるか知ら。まア、今日はおかんのしてあるところを一つしかど？』  
翌日である。

丹野は、昨夜泊り込んでしまった不思議な家の奥の間で、蒼く腫ればつたい顔附をして、矢張り例の女と差し向ひ、聊かボンヤリと坐つてゐた。

酔ひつぶれてしまつてからでは、何があつたのが記憶がない。ついさつき眼を覺ますと、自分にはちやんと柔かな蒲團の中に寝かされてゐて、蒲團をはねのけて出て見れば、陽當りのいゝ縁側に、齒楊子タオル洗面器が、キチンと並べて置いてあるし、さて顔を洗つて部屋へ戻ると、こゝでまた迎へ酒に、ちやんと一銚子ついてゐるといつた始末。何から何まで手抜かりがなく、まことに至れり盡せりの歡待だから、どうもこれは夢ではないかといふ氣もする。昨夜は元氣だつたが、妙に今は落着きがなくて、キョト／＼そこらを見廻しながら、照れ臭さうに盃をとり上げてゐるのだつた。

女は、昨夜と變つた仕立ての洋装で、しかし、相變らず例の媚びのある眼附だつた。  
『ところでね、丹野さん——』  
『は。』

『は——なんて、固くなりつこなしにしてよ。あたし、愈々あなたに昨夜も話しかけて置いた、共同戦線のこと相談しようと思ふんだけど。』

『共同戦線、大賛成ですね。一體しかし、その戦線といふのは？』

『カマキリ支配人よ。M商會の支配人豊田清助をやつつけようといふのよ。あたし、あなたがあの男のため、犠にされたことを知つてゐるし、あたしもあの男に恨みがあるの。二人で、一緒にあの男をやつつけるつての、どう、面白くない？』

漸く女の持ち出した話の筋は、意外にもカマキリ支配人のことに關係してゐる。丹野は、思はず眼を丸くして、グイと膝を進めてゐた。

『ほう、こいつはどうも。カマキリを退治しようつてのなら、面白いにも何にも、無論相談に乗りますよ。だが、あの男をあなたが恨んでゐるといふ譯は？』

『さア、その譯はあたし、言つてもいゝけど言はずに置くわよ。その代り、あなたが一緒にあたしに加勢するなら、あたし、總ての利益は二人で山分けにするといふ約束をしてもいゝの。あのカマキリ、一體はM商會へ來てから、あなたをなぜすぐと敵にしてみましたのか、その理由をあなた知らないでせうね。』

『さア……そいつは。』

「つまり、表向きは、あなたがお店で怠けてばかりゐたり酒を飲んでゐたりする、その勤めぶりがいけないといふ理由だつただけで、實はあの豊田つていふ奴、M商會で大變なことを始めてゐるんだわ。あの男が支配人になつてから、M商會の店先には、一カラット以上のダイヤモンドで、本もののダイヤは、一つだつて並んでゐないやうになつちやつたの。店にあるのは、皆模造品の寶石ばかりで、それといふのが全部豊田の仕事だわ。カマキリは、店にある品を、總て巧妙な模造品にして置き、その代り、自分の手に入れた本もののダイヤを、勝手に賣り捌いて儲けてゐるのよ。模造品で騙されてゐる商會主のはうでは、模造品がいつでもちやんと並んでゐるから、その買手がつかないのだと思つてゐるし、陰では支配人の懐中が、どん／＼大きく膨れて行くのよ。もしかしてあの店に、あなたが前のやうに勤めてゐたら、いくら巧妙な模造品を置いたところで、それであなたを胡魔化すといふ譯には行かないわね。あなたが、邪魔だつたから、あなたを滅にしまつたんだわ。どう、判つて？」

丹野は、

「ウーム。」思はず、唸り出さんばかりだつた。

なるほど、さう言はれて見るとさうかも知れない。模造品は、随分巧妙なものもあるのだし、店では店の品物だと思つてゐるだけ、毎日その品質を吟味するといふわけではないのだから、

ら、店員がこつそりと模造品で入れ換へをやつたら、案外氣がつかずゐるといふことも十分有り得る。さては支配人め、やりをつたな……と、ムカ／＼腹が立つて來てしまつた。

「ね、丹野さん。さういふわけで、あなたはこれを、黙つたまゝで見えてゐることが出來て？」

女は、新しく酒のかんをしながら、嘸しかけるやうにいつた。

「イヤ、無論……」

「出來ないでせう。出來ないのが當然だわよ。あたし、あなたが、それを知らずにゐるのも氣の毒だつたし、一方には、さつき言つたカマキリへの恨みもあり、そこであたし達、カマキリ退治をやらうと思ひついたので。退治といつたところで、カマキリを牢屋へ叩きこむぐらゐちやつまんない。あいつを苛めて、あいつの儲けただけのものを、こつちへ捲き上げてしまふ算段が肝要だわ。——あたしね、そのためには、あなたが一べん、カマキリ支配人に會つて見るのがいゝと思ふわ。」

「會つて、どうするんですか。」

「あいつを、出來るだけ一つ嚇して置くのよ。日本一の鑑定家丹野恒吉さんが睨んだとなつたら、もうあいつ、お店へ、模造品を置くことも出來なくなるし、一方では悪事が露見したと思つて狼狽するし、そこであたしは搦手へ廻つて、すつかりとあいつの儲けを吐き出させてやるわ。」

儲けを吐かせてしまつてから、あなたは堂々と出るころへ出て、カマキリの悪事を發表してやれば、それで溜飲の下がるやうな仇討ちになつてよ。』

女は、かなり痛烈なことを考へてゐる。

カマキリを、叩き伸ばして踏み倒して、さてその上で警察へ引渡さうといふ、念入りな退治の方法を樹てゐるのだつた。

丹野は愉快になつて来た。

なるほどこれなら、十分に共同戦線を張るだけのものはあると思つてしまつた。

『どう？ 呑み込めて？ あたしと一緒にやつて下さるわね。』

『やりますとも。オーケーですよ。』

『さう、ぢや、祝盃にもう一つ。』

やがて、二人の間では、すつかりと意見が一致した。さうして、そのあと、實行方法についての相談が始まり、その時女は丹野に勧めて、丹野から豊田支配人あて、至急面會したいといふ手紙を一本急いで書かせた。あとで思ふと、この手紙こそ、女にとっては、最も大切なものだつたのである。

手紙には、大體丹野が、豊田支配人の模造ダイヤ事件を、すつかり知つてゐる旨が書かれてゐ

た。更にまた、今夜銀座裏の××ビルディング、三階の某室までこつそり出向いて欲しい旨が書き添へられてゐた。

書き終つた手紙は、すぐ女が外へ持つて出て、速達で發送したからとのことだつたが、それから丹野は、またしても酒を勧められて、夕方、豊田支配人に會ふといふ約束の時刻が近づいた頃には、かなり深く酩酊してしまつた。夜、女は、

『さア、もう、出掛けた方がいゝわよ。』

丹野の腕をとつて家を出て、表でタクシーを拾つたが、

『ウフ、大丈夫、大丈夫。なアに、これくらゐの酒で酔ふものか。行つて、あのカマキリめ、ひどい目に遭してやるから。』

丹野は、偉さうにいつて威張つてゐたものである。

## 死せる支配人

××ビルディングといふのは、行つて見ると、ひどく淋しいところだつた。

長いうち、銀座で暮らしてゐた丹野にも、こんなビルディングがあつたのかどうか、ハツキリ記憶のないやうな建物である。

見上げると、三階に、一個所燈火のついてゐる部屋があつて、

『あそこよ、ねえ。』

と女が促がしたから、丹野は、躊躇はすその暗い階段を上つて行つたが、断つて置くこの時に、彼は昨夜浅草をウロつき歩いてゐた時と同じに、あのジャケットにズボン一つ、再びみすばらしい服装だつた。豊田支配人を嚇すのには、そのギヤングめいた服装の方が凄味が利くだらうからと女がいつて、わざとかういふ恰好をさせられたのである。

階段を登る窸音が、ゴトン／＼と重たく響く。

やがて、さつき燈火の見えた部屋へ着いたので、

『どうしますかね、これからカマキリに會ふのには、二人で一緒でもいゝんですか。』そつと丹野が訊ねたが、女は、

『いゝわ。一緒でいゝのよ。こゝであたしの顔を見せて置くのも、あとで却つて都合のいゝことがあるから。』

事もなげに答へてゐる。

ふと丹野は、支配人に會ふのなら、わざとこんな古ぼけたビルディングの一室を選ばずとも、もつとほかに、料理屋とかホテルとか待合とか、適當な場所がありさうなものなのに、と考へ出

して、少し變な氣持もして來たが、兎も角こゝへ支配人が來てくれるやうにといふ、手紙を出してあるのだから仕方がない。

彼は、ちぎに、その部屋の扉を開けた。

さうして、中へ入ると一緒に、オヤツとばかり立停つた。

部屋の中央には、テーブルがあり椅子があり、その椅子の一つに、誰かどぐつたりと崩れ込んだやうな姿勢をして腰かけてゐる。

『……？』

ふり向いて女の顔を見ようとすると、女は、今入つたばかりの扉をうしろ向きになつてピツタリと鎖し、鍵でもかけてゐる様子である。丹野は、急に、ある不安を感じ始めた。さうして、またちつと椅子の上の人物を見て、今度こそ、

『呀ッ！』と聲に出して叫んだ。

その人物は、テーブルへ顔を伏せ、顔を挟むやうにして兩手をぐいと伸ばしてゐるが、明らかに、呼吸をしてゐない。眠つてゐるのではなく、死んでゐるらしいのである。

『どうしたの、丹野さん？』

と女は、思ひもよらず、平然たる口調で訊ねた。

『イヤ、あれは？』

と、丹野が顔でしやくるやうにして、眼の前の椅子を指し示すと、

『死んでゐるのよ。よくごらんなさい。カマキリが、死んでゐるんだわ。』  
益々、落着いた口調だった。

『カマキリが死んでゐるつて、ど、どうして？』

『どうしてかつてことは、あとで解るわ。あなた、うしろから行つて、抱き起してごらんなさいよ。』

『ふーん。』

丹野には、てんで事情が、呑み込めなくなつて來た。

彼は、女の顔を見上げ、また、椅子の上をそつと眺めて、それから意を決して近づくと、言はれた通り、その椅子の上の人物を抱き起して見たが、忽ち、

『ヒエツ！』

と聲を立て、うしろへ下がつた。

なるほど、それはカマキリ支配人に違ひなかつた。しかも支配人は、胸に短力を突き刺されて、ぐつたり絆切れてゐる。誰かに、殺されたものと見えるのだつた。

その時、思ひがけず、部屋の方に垂らしてあつたカーテンが揺れると、そこから、ヌツと現れた男があつたが、男は顔に黒い覆面をしてゐる。さうしてその覆面の間から、チラリと素早く視線を走らせ、女と何か眼配せをしたやうだつた。

丹野は、また、仰天してゐた。

支配人の死體と黒覆面の男とを、交互にキョロ／＼うち眺め、さて、説明を求めつゝもりで、再び女の顔をふり向かうとしたが、この時もう女の手には、一挺の黒光りする短銃が握られてゐる。

黒覆面と女との間に、こゝでまた、鋭く短かい眼配せが交されたかと思ふと、女は丹野に身近くすり寄るなり、手にした短銃の筒先きを、ピタリ、丹野の腋の下へ、無言のまま押付けてしまつた。

事態は、どうやら、ひどく變てこなものになつて來てゐるのである。

丹野は、

『オ、オイ……冗談ぢやないよ。こりや……一體、どうしたといふことなんだ、え、オイ……これは……』

と、吃つていつたが、



「はつはつはつは、吃驚してゐるやうだね丹野君。まア、静かにしてゐて貰はうぢやないか。騒いなり聲を立てたりすると、どてつ腹へ、鉛の弾丸が飛び込むぜ。」

はじめて疑問の男は覆面の下でいつて、ぐいとそばへ近づいて来た。

丹野は、石のやうに突つ立つたまゝだつた。實に不意打ちで、進みもならず退きもならず、たゞ呆れて驚いてゐるでゐて、しかもその間に、近づいて来た黒覆面のため、口へはスポリと猿轡をかまされ、手や足までも、何か革紐のやうなもので、ギツチリと縛り上げられた。女が短銃を、確かにいつでも、うち放すぞといふ意気込みを見せてゐる。このため、意気地なくも、相手のなすがまゝになつてしまつたのだつた。

「お利口さんね丹野さんは。よく静かに温和しくしてゐたわ。」

丹野の自由を奪つてしまつてから、女はニッコリ笑つて言つた。

さうして黒覆面の男も、

「フ、ン、利口にや利口だが、少しばかり血の廻りは悪かつたやうだね。フッフッフ。」

憎々しげに鼻を鳴らして、眞向きに丹野の前へ来て立つた。

「オイ、どうだね丹野君。君は、譯がまるつきり判らなくて困つてゐるだらう。冥途の土産に、説明だけしてやらうか。」

「ウ、ウ、ウ……」

「はじめに、ハツキリ言つて置くが、この女は俺の女房だよ。それから、女房が、君に話したことのうち、間違つてゐる部分があるから、そこだけ訂正して置くと、M商會で、カマキリ支配人が、模造寶石を作つて不正を働いてゐるといふ、こゝは是非とも訂正しなくちやならないんだよ。」

「……………」

「實はね、模造寶石で、ちよいと荒つぽい儲けにとりかゝつたのは僕なんだ。さうして支配人は、その僕のやつたことを、どうやら薄々と感付いたんだ。もつとも、遅かれ早かれこんなことは、いつか露見するには違ひないが、そこで僕は、いつそのこと、この罪を支配人に塗りつけてやらうと考へたのさ。M商會の店内で、ダイヤがふんだんに紛失してゐて、代りに模造ダイヤが置いてあると發見された時、支配人が實はそれをやつたのだと、世間へ見せかける手段を講じたのだ。君はつまり、そのからくりの道具でね。」

「……………」

「いゝかい。判るだらうね。君は、支配人に手紙を出して、支配人がさういふ悪いことをやつたといつて非難してゐる。しかも一方君は、支配人に敵にされたのを恨んでゐる。こゝで君が支配

人に會つて、支配人と争ひを起したといふことは、あとで誰でも想像するよ。争ひの結果、支配人は、君に殺されたといふことになり、さてまた同時に君の方は、その格闘の際支配人のため、ピストルで打ち殺されたといふことになるのだ。結果として支配人は、M商會のダイヤを胡魔化したのが原因で、君に脅迫をされるやうになり、更にまたその結果がこのビルの一室での會見となつて、互ひに殺し合つたといふ體裁が成立つ。支配人は、ダイヤ胡魔化しの罪を背負つて行つてくれるし、あとはこつちの高見の見物、一石二鳥とはこのことだね。はつは、ムム』

黒覆面の正體は何者だらう。

彼は、さも愉快さうに爆笑した。  
丹野は口惜しがつて、何か一生懸命に絶叫しようとしたが、猿轡が邪魔で何も言へない。それを黒覆面は、氷のやうに冷たい視線で、チロリと横に眺めて置いて、ゆつくり女の方へ手をのばすと、

『ピストル——』

と低い聲でいつた。

總ては、冗談やお茶番ではない。

黒覆面の手で、短銃は、改めて丹野の胸へ向け直された。

さうしてすぐに、だーん！ といふ激しい銃聲が響いた。

丹野は、ムムツムと咽喉の奥で呻つたきり、あとは苦しげに悶擾してゐる。

『ね。今の音で、誰か人が来やしない？』

と女が、心配さうにして黒覆面にいふと、

『ウム、逃げるのだ。が、待てよ。』

黒覆面は、まだ死切らずに苦しがつてゐる丹野の身體から、急いで猿轡を外し革紐を解いて、更にまたそこに激しい格闘のあつたといふ形跡を作つてから、

『これでよし。急所を外れたかも知らんが生き返りはせん。死人に口無し、大丈夫だ。』

と、早口にいふ。

二人は、最後に猶彼等の犯跡を晦ますため、多少の工作を施こして置いて、それからちきにそこを逃げて行つてしまつた。

可哀相に丹野恒吉は、女と共同戦線を張るつもりでゐて、實はうま／＼一杯喰はされ、女と黒覆面との傀儡にされてしまつたのである。

——殆んど十分以上経つた時、X×ビルの地下室にゐた番人は、何か階上の方で變な音がしたといふことを、通行人によつて注意され、さてノコ／＼三階へ上つて來ると、はじめてこゝで驚

くべき惨劇を發見した。

事件は、急に大騒ぎになつたのである。

### 記號は語る

最初警察當局では、無論何も知らなかつた。

急報に接して係官一同來て見た時に、彼等は先づその問題の部屋が、貴金屬商M商會の支配人豊田清助氏が最近借り受けたばかりの、個人事務室であるといふことを知つた。豊田支配人はM商會のみでなく、ほかにも關係してゐた事業があり、そのため××ビルの三階へ、自分だけの事務室を持つてゐたのである。

ところで事務室には、二つの死體が轉がつてゐる。しかも激しい格闘の形跡がある。ビルの番人の證言によると、死體のうちの、胸を短刀で突き刺されてゐる方は、明かにこの事務室の主人豊田清助氏であるとすぐに判つたが、續いてまたそのあとから、短銃で殺されてゐる方についても、容易く身許が判明した。豊田支配人の死を急遽M商會へ知らせたので、商會の店員が折返しこゝへやつて來たが、すると、直ちにこのジャケット一枚のみすばらしい男が、もと店にゐた丹野恒吉だと申立てたのである。

係官達は、死體を檢視し、現場を調べ、その時重大な二つの發見があつたが、それは、一方の死體豊田支配人の服の内ポケットから、一通の奇怪な手紙が發見されたこと、も一つは、丹野恒吉の死んでゐるちきそばの床に、血潮で書き止められたらしい、不思議な二行の數字が發見されたことである。

血潮の數字は、

pt. 1.100,

1950

とだけ書かれてゐる記號のやうなもので、これは最初係官達が見ただけでは、一寸何のことだか判らない。さうしてしかし、豊田支配人のポケットから出た手紙の方は、讀んで見て一同ウームと呻つた。

そこには、驚くべきことが語られてゐる。文面によれば、豊田支配人はM商會のダイヤを着服し、代りに店へは巧妙な模造品を並べてゐるのだとある。丹野がそれを看破して支配人詰問のため、今夜こゝで會見しようといふ意味になつてゐるのだつた。あとで調べて判つたが、筆蹟は確かに丹野の筆蹟。丹野が支配人を呼び出したといふことが明瞭である。

M商會へは、再び係官が、先きに來てゐた店員と一緒に駆けつけて行つた。それから、す

ぐと店のダイヤを調べて見た。

と、平生は、まさかそんなことがあらうとは気がつかずにも、その気で調べると直ちに判ることである。そこにある大粒の高價なダイヤは殆んど全部模造品で置き換へられてゐるのが判明した。それは所謂フランス・ダイヤで、しかし、實に巧妙な模造品だつた。素人なら勿論のことその道の商賣人でも、手にとつてよく眺めないと模造品であるとは判らぬほどのものだつた。模造品だと知つて、店内一同口アングリ、ものもろくに喋れなくなつたが、さてそこで係官側では、今や事件の真相を、すつかり、知つてしまつたやうな氣持がした。

「ウム、コリヤ、豊田支配人といふ男は案外喰はせ者だつたんだね。店を自由にする位置にゐて、とんだ悪事を働いてゐたのだ。丹野の方は、これをちやんと嗅ぎつけて来て、支配人を脅迫し、こゝで二人が言ひ争ひを始めたのだ。争ひの結果掴み合ひになつて、丹野は支配人を短刀で刺し、刺されつゝ支配人は、ピストルで丹野をうつたのだらう。こりや、どつちもどつちの泥仕合だよ。」

何のことはない、黒覆面が計畫した通りに、事情を全然誤解しかけた。

言落したが現場には、その短銃も、ちやんと落ちてゐた。これに、ハツキリ支配人の指紋がついてゐたし、更にまたM商會側からの申立てだと、丹野が支配人を恨んでゐたといふ事實も判

つた。これで、この惨劇を説明する情況は一通り揃つてしまつたのである。

黒覆面と女とは、無論蔭でビク／＼しながら、しかし、ニンマリと笑ひ合つてゐたことであらう。

問題が、これだけで兎になつたとしたら、彼等は大いに祝盃をあげることが出来る。悠々、大手をふつて、ひそかに着服したダイヤを賣り捌きに出られる。

その時分に、まだしかし一つだけ問題として残つてゐたのが、例の血潮の記録、『Pt. 110C, 1950』のことだつた。これは、係官には意味が判らずに、暫らくそのまゝで放つたらかして置かれたが、後にM商會の一店員は、記號を一眼観ると首を傾げていつた。

「ほう、これは妙なものが書いてありますね。一體どうしたのでせうか。」

「ウム、こりや、我々にも見當がつかないのである。血で書いてあるところを見ると、どうやら、丹野が、ピストルでうたれてから、まだ少し息があつて、苦しき悶搔きながら、床へ書き残したものと思はれるんだが。」

係官が説明すると、

「さうですかね。ちや、丹野が書き残したといふんなら、これは矢張りさうですよ。こいつは、ダイヤにつける記號でしてね。」

と店員はさう。

訊いて見ると、それは次のやうな意味だつた。

“Pt.”と“S.”のは“platinum”つまり白金と“S.”と“1.10”は一・一カラット。更にその次の数字は、千九百五十圓といふ価格を示してゐるといふのだつた。

『フーム。』

一同改めて、首を傾げ始めてゐた。

死際に丹野が、なぜこんなものを書き残したか、てんで見當がつかないのである。いろ／＼憶測を語り合つて見たが、結局、何も解決が浮かばない。係官達は、その晩、一先づ××ビルを引上げてしまつた。

ところが、早くもその翌日の午前中のこと、警察当局の窓口には、一人の商人體の男がひよつくり出頭して來たのであつたが、それがため事件は、急に激しく思はぬ方向へと轉廻し始めた。

出頭した商人體の男は、

『へい、私は、本郷の方で小さな貴金屬商をやつてをりますのです。今朝、實は新聞を見まして、その中に妙な記號のことが書いてあつたものですから、一寸した心當りもあり、それで出頭したのです。』

恐る／＼申立ててゐる。

『ナニ、あの記號についてだつて？』

『へい、左様でございます。實は手前共、最近にあの記號にあるのと同じダイヤを、店で取扱つたのでございます。それは指環でしたが、臺のプラチナを痛めまして、これを修繕するやうにといつて持込まれたのでした。その時、大分見事な品でしたから、お客様に伺つて見ますと、大きさは一・一カラット、値段が千九百五十圓だつたといふお話で、それを私、新聞を見てすぐと思ひ出したわけでございます。ついでに申しますと、そのお客様は御婦人として、つい手前共の店の、ちぎと近くにお住ひですが、何でも旦那様の方は、銀座のM商會へお勤めだとかのことで、指環の修繕を頼まれました時にも、旦那がM商會へ出てゐるのなら、何もかういふ品の修繕など、ケチな手前共の店へなど持つて來ないで、M商會でお直しになつたらよかりさうなものだと、私、不審に思つたほどでございます。』

これがいかに重大な申立てであつたことか。

係官達は、聞いてゐる途中で、ハツと眼を見合したほどのものである。

事件はM商會の支配人と、M商會から解雇された丹野恒吉との二人を中心としてゐて、しかもこゝに、もう一人、M商會の店員が關係してゐると判つたのだつた。

『オイ、一寸、待ち給へ。その、ダイヤの指環の修繕を頼んだといふ女の名前は？』  
『はい、それは、來島さんといふお名前です。旦那さんの方は、來島與一郎とか申されるさうですが。』

聴くと齊しく係官達は、パツと椅子を蹴つて立上るやうにしてゐた。その來島といふM商會の店員は、昨夜ガヤ／＼と立騒いでゐたM商會のうちに、ちやんと立混じつてゐたことに違ひない。そこにゐて、問題の記號が、自分の細君の指環のダイヤと、キツチリ一致してゐる事實がありながら、今に至るもそのことを一言も當局へは申出してゐない。こゝがもう、十分にその男を怪しんでいゝといふ根據になるのだつた。

疾風迅雷手配は行なはれた。

さうしてM商會からは、直ちに來島與一郎が、引致されて來た。

來島は、丹野と同じに、古くからM商會に勤めてゐた男で、顔に凄味のある美男子である。引致された時に彼は、

『え、何です。ど、どうして？私に、何か一體怪しいことがあるのですか。』

白ばつくて驚いた風を装つてゐたが、同時に一方で係官達は、本郷の彼の住居へも赴いて、こゝで細君を取押さへると共に、その細君の指には、果して問題のダイヤが燦然として輝いてゐ

るのを見たし、更に調べると、押入れの天井に隠してあつた手提金庫の中から、時價一萬圓近くの大ダイヤを筆頭に、大小數十顆のダイヤを發見したので、もう何もこれで彼等に言ひ抜けさせる餘地がなくなつてしまつた。

ダイヤの山を突きつけられて、さすがの來島も、顔色を眞蒼にしてゐた。

さうして、寧ろ彼の細君より先きに、逐一、犯ろしい犯罪の経路を自白してしまつた。いふまでもなく、X×ピルの黒覆面は、この來島與一郎だつたのである。さうしてM商會の模造品と置き換へられた本もののダイヤは、全部、この男の手にあつたのである。彼は、燈臺下暗しの諺に倣つて、大膽にも自分の店内で悠々ダイヤを着服し、しかも實際は彼自身、主としてダイヤ部の取扱ひをやつてゐたので、あとでは、これを模造品と置き換へられたのだとは、全く気がつかずにゐたと申立てるつもりで、萬事計畫を進めたのである。

途中で、カマキリ支配人が、どうやら模造品に気がついたらしく、この結果として一石二鳥、丹野を利用しての恐ろしい芝居をうつたのであつたが、たつた一つの失策は、細君の指へ、着服したダイヤの一つを、ちやんとはめさせて置いたことである。

恐らく丹野は、死際の苦しまぎれ、女のことを、書き残したかつたのだらう。書き残したくて、女の名前を知らないから、こゝで女の指にあつたダイヤの特質を、辛くもそこへ書残したこ

とに違ひない。  
 怠け者でも飲んだくれでも、彼は確かに鑑定眼が鋭かつた。女の指にはめてゐるのを見たゞけで、ハツキリとその大きさを知り、価格を言ひ中てゝ置いたのである。どうせ、自殺するつもりだつたのだから、或は彼の死は、それほど悲しんでやらなくてもいいことかも知れない。豊田支配人の方は氣の毒だが、丹野恒吉の方は、死して猶、鑑定家としての名譽だけ保つことが出来たといつてもいいではなからうか。

昭和十四年十一月廿一日印刷  
 昭和十四年十一月三十日發行

花骨牌鬼語



定價金二圓二〇錢

著作者 大下宇陀兒  
 發行者 東京市四谷區坂町一九  
 島直  
 印刷者 東京市豊島區高田南町一ノ三六四  
 道又好三

發行所

東京市四谷區坂町一九  
 野島書店

電話四谷五五二一  
 振替東京七六〇九五番

396  
559



終



hisawo.6